大阪医科大学学報

第88号
インターネット版
平成23年５月

山吹

◆目　次◆

平成23年度入学宣誓式…… 2
定年退職のご挨拶…… 5
新任教授紹介…… 9
名誉教授・功労教授称号授与・受賞等について… 10
研究助成金等について…… 11
学位記授与式…… 12
平成23年度事業計画と予算の概要…… 16
中山国際医学医療交流センター…… 25
看護学部…… 28
臨床研究教育研修会報告…… 29
学内行事…… 30
市民公開講座…… 34
行事日程…… 35
義援金報告・寄付金報告…… 36
主要会議報告…… 38
入学試験・国家試験状況…… 42
卒後臨床研修センター…… 43
病院看護部…… 44
感染対策室・平成22年度病院患者動態・
平成23年度採用臨床研修医…… 45
医療安全対策室…… 46
褥瘡対策室…… 47
平成23年度LDセンター活動予定 …… 48
大学安全対策室…… 49
保健管理室からのお知らせ…… 50
歴史資料館・俳句…… 52
周産期センター・病院ボランティア…… 53

平成23年度入学宣誓式

医　学　部　看護学部

日　時：　平成23年４月５日（火）14：00～
場　所：　高槻現代劇場　大ホール（市民会館）
入学生：　医学部医学科　112名　　看護学部看護学科　88名

■平成23年度　医学部　看護学部　合同入学式　式辞

学長　**竹中　洋**

大阪医科大学医学部第66期生並びに看護学部第２期生の皆さん、ご入学おめでとうございます。また、保護者の皆様にも御祝い申し上げます。合わせて、入学式ご参列頂いているご来賓並びに本学教職員各位には心より御礼申し上げます。

先に案内がありましたが、本年の入学式は東日本大震災という未曾有の国家的危機と、日をおかずして執り行われる格別の意味があるものでございます。皆さんは今後、犠牲者への鎮魂と被災地の再生への希望が交錯する時代意識の中で、大阪医科大学で学生生活を送られることになります。

医学や看護学に未来を託された皆さんは、科学の発展が自然の脅威の前で無力であったこの現実をどのように考えておられるでしょうか？　引き続く福島第一原子力発電所事故の問題は、今後５年から10年後に生じるかもしれない、日本人の健康被害について大きな影を投げかけています。私は耳鼻咽喉科医でありますが、小児の甲状腺がんは、30年の長い頭頸部外科医の生活で僅かに１例経験があるのみです。チェルノブイリの再来が日本に起こらぬことを念願しています。

さて、大阪医科大学は1927年に大阪高等医学専門学校として誕生致しました。西日本では最も歴史の古い私立医科大学であります。大学院医学研究科を1959年に持ち、昨年、看護学部を開設致しました。建学の精神は「学を離れて医はない」とし、医学や看護学の基盤の上に立つ医療人の育成を目的としています。医学部は「本学が求める学生像と教育の方針」の中で、建学の精神に則り「国際的視野に立つ」ことが強調されております。振り返って1927年創立の時、文部省に提出された学科課程表には第１学年から第４学年まで語学が履修され、その対象は英語、ドイツ語、中国語、マレー語、スペイン語、ポルトガル語並びにインド語とされておりました。時代背景は異なりますが、創立当初から国際的視野を持つ医療人の育成に本学が努力をしていたことが窺えます。

一方、看護学部では「自ら考え行動する意欲を持ち社会に貢献できる」学生を求め、「双方向性の教育」を教育方針の基盤においています。また、大学としては「医看融合教育」を共通課題として掲げ、教育カリキュラムの共有化による、人間性豊かな高度医療職業人の育成を新たな目的として計画しています。

皆さんは再生医療や遺伝子医療と言う言葉はご存知だと思います。ヒトゲノムが解析されて約10年を

経ました。アメリカ合衆国では、国民が予防医学や自らの健康管理の視点でパーソナルゲノムを知る時代になってきています。正にポストゲノムの時代が到来した訳です。我が国でも、遺伝子診断に係る技術が「先進医療として登録され、実地医療へ応用される（これを専門語で保険収載と言います）のを待っています。入学された皆さんが働くであろう職場では、パーソナルゲノムに加えて、家族歴と本人の職住環境や嗜好から、将来の疾病の危険性が予測される社会であります。技術としての手術の位置づけも大きく変わることが分かっています。

その様な時代要請に応えるため、大阪医科大学では学部教育の改革に正面から取組んでいます。看護学部は設置基準の中に理想的な看護教育を組み込めたと確信しています。医学部ではPBLチュートリアルの導入を終え、本学の教育の特徴である「自ら学ぶ」をより有効に発展さすべく、教育カリキュラムの精力的な見直しを行っています。第105回医師国家試験では103名卒業生全員が合格しましたが、地に着いた国試対策と学生諸君の踏ん張りが招いた結果であります。皆さんも、大学に入学したことに満足と安心をせず、将来の夢の実現に今日から目覚めて頂きたいと思います。

大阪医科大学の学生が学ばなければならない専門科学である医学や看護学は、現代医学の基礎となる解剖学や生理学から先に述べた先端科学まで膨大な知識量となっています。しかし、多くの医療人は病める人と接し、情報を得、知識や技術を間違いなく使うという、高い職業倫理と社会的役割分担を求められています。皆さんには、医師や看護師が本質的に持っているこの重要な責任についてここで再度確認を頂きたいと思います。その為には、学部学生の間に社会人として成熟し、社会貢献に勤しんで下さい。

超高齢少子時代を迎え、地域医療崩壊が叫ばれ、医師・看護師不足が取りざたされています。しかし、本日入学された皆さんが、成熟した医療人になられるのは、看護師で10年後、医師で20年後としますと、日本人の人口は減少し確実に１億人を切っています。急務は医師、看護師が協調して働き、国民の幸福に繋がる医療を構築して参ることであります。私達はそれを医看融合と考えています。

ここに入学を許された皆さんは、大阪医科大学学生として新しい時代を切り開く希望を持った医療人を目指し、同じ学び舎に学ぶことを自覚して頂きたいと思います。我々教職員も新しい時代の医療人育成に全力を注ぎたいと考えています。

以上をもちまして、学長式辞と致します。

大学院医学研究科

日　時：　平成23年４月４日（月）10：30～
場　所：　別館３階　大学院多目的講義室
入学生：　47名

■平成23年度　大学院医学研究科入学式　式辞

学長　**竹中　洋**

本日は大学院入学お目出とうございます。皆様の入学に際して、医師、大学人としての自らの経験に即して式辞を述べたいと思います。また、大学院改革も一定の方向性が見えましたので併せて報告をしたいと思います。

私が出生した約60年前、妊娠・出産は女性の大仕事と言われていました。乳児死亡率も大変高いもの

がありました。また、その数年前には第二次世界大戦中で戦死が最大の死亡原因であり、戦病死を考えれば、実に多くの命が失われていたことになります。その後暫く結核は日本の死亡統計で最多のものであり、PC、SMやKMの発見により、急速にその他の感染症も制御されました。現在ではがんや脳出血、心筋梗塞が死因の大部分を占めています。一方、自殺は年間３万件を超え、交通事故死も大変な数になります。

しかし、感染症についても結核は再燃しますし、多剤抗生物質耐性菌は増加しています。AIDSは世界的規模では収束の方向性にありますが、地域では増加を示しているところもあります。一次がんは制御できても、三次がんは多くの場合克服できません。

３月の東日本大震災は言うまでもなく、最終的に外部環境とヒトの相克は無限に続くものと考えられます。医学・医療が立ち向かう課題は無数にあります。本学には設けられていませんが災害医療や放射線生物学も魅力的な研究対象であります。さて、皆様は大学院に入学されて研究対象を何にされますか？現在の大学院医学研究科を見てみますと、予防・社会医学、生命科学、再生医療並びに先端医学の４つの研究コースと高度医療人養成コースが設けられています。コースのなかで課題をできるだけ早く見つけられることをアドバイスしたいと思います。指導教官とよくご相談下さい。

大学院はアドミッションポリシーを定め、学則に定める以下の内容に対する深い理解と高い志を持った学生を求めています。「医学の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて、文化の進展に寄与すること」そして「研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うこと」。皆様がまさにそれに該当します

一方、平成19年度以降大学院は実質化を目標に多くの改革の最中にあります。近々大学院教員組織が立ち上げられ、ソフト面では一定の成果が得られます。また、教育や研究に係る組織も変更が予定されています。大学院にとって記念すべき平成23年度に入学される皆様には丁寧に説明を行いますが、疑問点があればお尋ね頂きたいと思います。

最後に、未曾有の国家的危機に直面している我が国で、純粋に教育を受け研究を行う環境に恵まれていることを皆様とともに感謝し、式辞の結びと致します。

日本の医学医療の未来は君たち若き研究者のために在ります。

定年退職にあたって

勝岡　洋治　（泌尿器科学教室　教授）

光陰矢の如し、時の経つのは早いもので、本年３月には定年を迎えます。関が原付近の降雪のため新幹線が大幅に遅れ、教授選考の面談の予定時間に間に合わないのではないかと気を揉みながら本学を初訪問したのち、本学へ着任のため再度JR高槻駅に降り立ったときの名状しがたい緊張と気持ちの昂ぶりを思い出します。着任当時、前年に起きた阪神淡路大震災の傷跡はすでに修復され、少なくとも高槻市内はすっかり復興しておりました。爾来、繁忙と緊張の日々を過ごしてきたというのが素直な気持です。

私が本学に赴任した時期、泌尿器科学教室はいまだ混乱期にありましたが、教室再興に向けた教室員の意気込みに後押しされて、瞬く間に活力を取り戻す事ができました。診療、研究、学会活動など教室員と一心不乱で走り続けて来ました。その結果、教室員が刮目して見なければならないほど私の想像を超えて逞しく成長を遂げたことに誇りと喜びを感じています。私にとりまして、教授の職責を十分果たせることができたとは言えず、忸怩たる思いがありますが、一方で、本学で過ごした歳月は充実した、しかも大変幸せであったと実感しております。歴代の理事長、学長、教授会の面々、そして多くの教職員や事務職員の皆様に支えられての15年でした。人生の同伴者を意味する「人と人が関わったとき、どういう関わりであれ、一度その人に触れた、その人の人生を通過したということは消しがたく一生残っていくのだ」という某有名作家の言葉が思い出されます。

改めて教室在職15年を振り返ってみますと、諸々の出来事が走馬灯のように思い出されますが、中でも特筆すべきは、泌尿器科学教室一門の悲願でした第95回日本泌尿器科学会総会を主催できたことです。開催年度の平成19年は本学創立80周年、泌尿器科学教室講座開講50周年にあたりました。この記念すべき節目に伝統ある総会を主催できたことはこの上ない栄誉と受け止めています。

泌尿器科医41年の大半を大学人として身を処し、最後は関西の地で過ごした15年間、その思い出が詰まった職場を去ることは何ともいえない寂しさがありますが、退職後も引き続き大阪に残り、新しい職場で地域医療に専念する所存です。

最後に、本学および泌尿器科学教室の今後益々の発展を祈念すると共に、在職中公私にわたりお世話になった多くの皆さんに深謝致します。

定年退職にあたって

島原　政司　（口腔外科学教室）

この度、３月31日をもって定年退職することになりました。私は学園紛争真只中の昭和44年４月１日より大阪医科大学にお世話になっております。口腔外科学教室が新設された翌年になります。無給時代を含めますと約43年間お世話になりました。人生の３分の２を大阪医科大学で過ごしたことになります。この間、種々の出来事があったにも拘わらず大阪医科大学は着実に発展してきました。大学紛争、大学機構の改革、教育機構の改革、病院機構の改革が行われ、口腔外科学教室におきましは、２名の教授の退職、病棟、外来ならびに研究室の移転などがありました。４年前には外来の移転があり、それにともないかなり整備がされました。これを機会に、さらに外来の充実をはかり、よりよい環境下で診療ができるように努力してきました。３年前より歯科におきましても研修医制度が法制化され発足いたしました。現在は３名の研修医を受け入れています。教室の同門会も約170名になりました。

43年間を振り返ってみますと、さまざまなことが想いだされます。この間大学関係者、歯科医師会関係者ならびに教室関係者に大変お世話になりました。この稿をおかりいたしまして厚く御礼申し上げます。最も印象に残った出来事は、昭和57年８月の西ドイツ（現ドイツ）・チュービンゲン大学への留学、平成４年４月の教授就任ならびに平成７年１月の阪神・淡路大震災です。

西ドイツ留学は多くの症例を経験するとともに、多くのドイツ人の知人ができました。さらに日本では接する機会のなかった様々な分野の日本の人たちに接することができました。それに伴い私自身の考えもかなり変わりました。これらの経験は帰国してからの医療を行うにあたり、かなり影響があったように思われます。退職後、ゆっくり時間をかけて、ドイツの知人を訪れる予定です。

教授就任は私にとっては大きな節目となり、いろいろなことを考える機会になりました。初めて大きな壁にあたりました。いざ教室を担当してみますと、自分自身の力のなさがひしひしと感じました。しかしながら、大阪医科大学におきましては歯科口腔外科に理解があったことは、非常にこころの支えになりました。多くの他科の先生方に助けていただきました。あらためて感謝する次第です。また、同門会が設立され、歯科医師会に入会することになりました。教室にとっては強い後ろ盾になりました。

阪神大震災は静かに眼を瞑ってみますと、昨日の出来事のように思われます。今もって頭の中をよぎり、浮かんでは消える状態です。第二次世界大戦での神戸における空襲に匹敵する大災害が地の底から襲ってくるとは考えてもみませんでした。震災直後には通常のごとく勤務することが出来ませんでした。しかし、その間、大学、病院ならびに教室には大変ご迷惑をかけました。しかし、関係各位におきまして快く理解していただき、教室員をはじめ全外来スタッフがとどこおりなく業務にあたってくれました。

駆け足でこの43年間を振り返ってみました。43年の長い歳月、大した資質に恵まれていないにも拘わらずここまでたどり着けましたのは、周囲の環境、すなわち法人、大学、病院に非常に恵まれていたと考えています。大阪医科大学の皆様は、口腔外科を非常に理解していただきました。特に診療に関しましては大変ご協力いただきました。このような環境の中で、教室員ならびに外来スタッフの努力で教室は一歩一歩力をつけてきました。今後、大阪医科大学がますます発展しますように願っております。今後とも口腔外科学教室の発展と充実のために、なお一層のご支援ご鞭撻を賜りますようにお願いいたします。

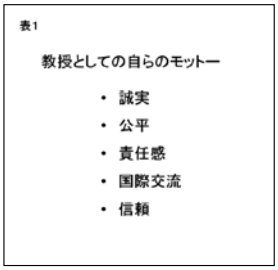
定年退職にあたって

谷川　允彦（のぶひこ）　（一般・消化器外科学）

過去14年間にわたり一般・消化器外科学教室を主宰させていただきましたが、定年退職にあたりましてご挨拶を申し上げます。

平成９年４月にはじまった教授在職は私にとりましても大変貴重で有意義な年月でした。この間には各教室の先生方をはじめ、看護師、検査技師、医療事務員、教学部門の従事者など各階層の方々にいろいろとご指導・ご協力を賜りましたことにあらためて御礼申し上げます。

振り返りますと、丁度折り返しの時期になりました７年前の平成16年３月９日に突然に視床出血を来しまして、１か月の入院治療を要し、ご心配をおかけいたしましたが、それ以外は１日の欠勤もなく、務めを果たすことが出来ましたのは、幸運であったと思っています。先日の最終講義でも述べましたが、多くの有能な教室員の協力を得て、臨床に、研究に、そして外科教育にと携われたことは、貴重な体験であったと感じています。また、平成17（2005）年６月から研究機構長を２期４年間にわたって務めたことも良い思い出です。南和子さんや永井利昭技師長など研究機構職員の協力を得て、機構改革や学内共同研究の啓発・推進を目的にしたシンポジウムを定期的に開催するなど、学内問題にいろいろと関係させていただいたことは良い経験でした。振り返りますと、やり遂げたことよりも、やり足りなかったことがいろいろ浮かんで参りますが、それでも一定の達成感を抱きながら本職を退かせていただくことをうれしく思っている次第です。



教授就任に際しての努力目標として自らの中に設定したモットーは５項目でした（表１）。人に誠実であり(1)、公平であること(2)。学内・学外そして海外研究者との交流を促進(4)し、教室員それぞれに臨床面・研究面の課題と責任を分担してもらい、それの達成を促す(3)と同時にそれぞれの個性を尊重して信頼する(5)ことでした。それぞれがどれほどに実行できたかの評価はいずれ明らかになることでしょう。米国の代表的な医育と診療の機関であるMayo Clinic は兄のWilliam Mayoと弟Charles Mayoによって築かれましたが兄弟ともに素晴らしい言葉を沢山残しています。そのうちの一つはCharles による下記の言葉です（表２）。

“医学の進歩が目覚しいこの時代に生きてきた幸運を神に感謝する思いだ。でも、待てよ。そういえば、三十数年前に父親が同じようなことを言っていたっけ”。この言葉が記されたのは1900年の初頭ですが、その精神は21世紀の現代にもあてはまります。すなわち、“医学はどの時代でもいつも変化、改革の時期にあり、医学に従事する者は近い将来の変貌・発展に常に目を向けていなければならない”。と意訳したいと思います。近年の臨床外科学は内視鏡外科の導入によって国の内外を問わず大きな変貌を遂げようとしています。これより30年先、50年先の外科学のあり方を想定しながら若い学徒を正しく指導することの重要性をあらためて強調して退官のご挨拶といたします。

本学の今後の益々の発展を心から期待しています。

定年退職にあたって

金山　萬里子　（哲学教室）

昭和56年に本学哲学教室に助教授として着任して以来、毎日を慌ただしく過ごしていますうちに、いつしか30年の年月を経て、本年３月をもってなんとか大過なく定年を迎えることができました。この間、教職員の皆様をはじめ学生諸君からも温かいご指導とご支援をいただき、まことに有難うございました。

30年にわたる折ふしの想い出は数多く、振り返れば走馬灯のように浮かんでまいりますが、とりわけ懐かしく思い起こされるのは、やはり旧教養部解体以前のさわらぎ学舎での日々です。本学に就任後、最初の記憶として残るのは新入生歓迎会でした。当時の新入生歓迎会は、現在の新入生学外合宿のように大規模なものとは異なり、神峯山寺で七輪を囲んでのすき焼き会というささやかなものでした。その時はじめて耳にした学歌の、上のＧまで届く高音域と、「嗚呼南溟の空遠く　かのアマゾンの岸の花　はた崑崙かゴビの原…」という壮大な（少々時代がかった）歌詞に一驚を喫したことを思い出します。また、開学以来、唯一人の女性教授でいらした解剖学教室の鈎スミ子先生からお声をかけていただき、私がどぎまぎして、「私なんかとても…」というようなお返事をしたところ、「そんな弱気なことでどうするの！」と叱咤激励されたのもこの席のことでした。それからかなり後になりますが、微生物学教室の山中太木先生から丁重なお電話があり、たしかウェサリウス（Vesalius）あたりだったかとおぼろげに記憶しますが、ラテン語読解のお手伝いをさせていただいたことがあります。わざわざ京都までお出ましくださったのですが、最初私が待ち合わせの喫茶店の思文閣をうっかり有斐閣と聞き違えてしまって（当時は、百万遍を挟んで西側の思文閣、北側の有斐閣にそれぞれ喫茶店が併設されていました）、大方２時間近くもお待たせしましたのに、辛抱強くお待ちくださっていて露ほどもご不快の様子をお示しにならず、大いに恐縮したものです。就任当初には、学生有志の人たちと、Penguin Classicsを使ってソポクレスの『オイディプス王』を読んだ（読むことができた！）のも楽しい思い出の一つです。

こうした（古き良き時代の）ささやかな一々の場面が、私にとっての大阪医科大学の「原風景」と言えるでしょうか。現在は、大学をめぐる環境も大学への社会の要請も大きく変化して、ゆったりとした自由な学びの時を確保することはなかなか困難になってしまいましたが、若い学生諸君にも、本来的な知的探求を育む心のスコレー（余裕）を忘れないでいてほしいと願っています。

終りに、伝統ある本学の益々のご発展と、教職員の皆様ならびに学生諸君のご活躍とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

新任教授のご紹介－泌尿器科学教室－

この度、泌尿生殖・発達医学講座、泌尿器科学教室の教授を拝命いたしました。当泌尿器科学教室の歴史は古く、昭和32年５月に石神襄次教授を初代とし、２代目宮崎重教授、３代目岩動孝一郎教授と引き継がれ、４代目の勝岡洋治教授の時代には平成19年に開講50周年を迎えました。そして、平成23年４月１日から小生が５代目教授として教室を担当させていただくことになりました。これまで諸先輩先生方が立ち上げ培ってこられた歴史のある教室を引き継ぐにあたり、その責任の重さを痛感しています。

私は、昭和63年に本学を卒業して、直ちに大阪医科大学泌尿器科学教室に入局し臨床研修、病院勤務を行いました。その後、平成３年から助手として臨床･研究の修練を積み、平成４年からはアメリカ･ハーバード大学外科学教室に留学し腎移植の基礎免疫学を学びました。平成７年に帰国し、帰国後は主に泌尿器腫瘍の患者様を中心とした臨床研究と移植免疫における基礎研究を行ってきました。平成11年から３年間にわたり大津赤十字病院に赴任し、平成14年から現在までの９年間、大阪医大泌尿器科で勤務して参りました。

私の臨床・研究・教育に共通した基本理念は「今求められる医療の実践」を常に念頭に置いて、患者様に喜ばれる“いい治療”、特に、大阪医科大学泌尿器科に特徴的な治療の開発と提供に取り組むことです。例えば臨床では、通常膀胱全摘術を余儀なくされる浸潤性膀胱癌に対する「膀胱癌をとらずに根治する“大阪医大式膀胱温存療法”」の開発や、通常の薬剤療法が効かなくなった内分泌不応前立腺癌に対する「外来通院、内服治療が可能な高齢者に優しい新規治療：“大阪医大式内分泌化学療法”」の開発などがその代表例です。また、研究では「求められる医療の提供」を原点として臨床での疑問点や問題点を基礎研究に掘り下げ、その研究成果を臨床にフィードバックできるような研究を進めていきたいと考えています。今我々が取り組んでいる２つの大きな研究テーマ、腫瘍の領域での「転移のメカニズム解析と治療」、そして、移植領域での「免疫寛容誘導」は、この基本理念から生まれたテーマです。今後も、これらのテーマをさらに発展させつつ、一方では臨床における疑問点を手がかりとして、スタッフ全員が一丸となって幅広い分野で研究に取り組んでいく所存です。そして、教育における目標は「求められる医師の育成」です。臨床で患者様一人一人に喜ばれる医師、あるいは、研究で新規治療を開発し、数多くの患者様に喜ばれる医師、どのような形であれ、「先生が必要なんです！」と言われる医師の育成を目指しています。

まだまだ、未熟で若輩者ではございますが、これから諸先輩先生方の御指導を賜り、本学の発展に少しでも寄与できるよう尽力させていただく所存ですので、何卒宜しくお願い申し上げます。

泌尿生殖・発達医学講座
泌尿器科学教室
東　治人　教授

昭和37年11月生
昭和63年３月：大阪医科大学　卒　業
昭和63年５月：第49回医師国家試験合格（312286号）
平成３年６月：大阪医科大学助手（泌尿器科学教室）
平成４年８月：アメリカ合衆国ハーバード大学外科学教室に research fellowとして留学
平成７年12月：大阪医科大学助手（泌尿器科学教室）
平成８年５月：日本泌尿器科学会専門医 認定（965145号）
平成11年９月：大津赤十字病院　泌尿器科副部長
平成13年５月：日本泌尿器科学会指導医 認定（20010157号）
平成14年７月：大阪医科大学助手（泌尿器科学教室）
平成15年４月：大阪医科大学講師（泌尿器科学教室）
平成18年７月：大阪医科大学助教授（泌尿器科学教室）
平成23年４月：大阪医科大学教授（泌尿器科学教室）

名誉教授・功労教授称号授与　受賞等について

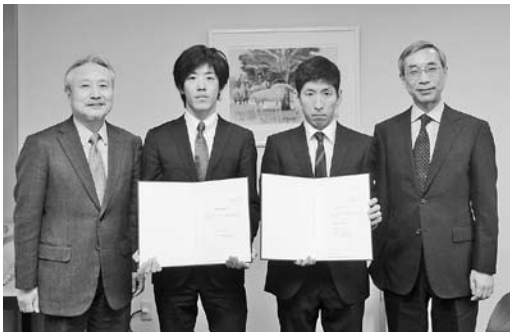
名誉教授・功労教授称号授与

平成23年４月１日（金）学長室において、３月末日をもって定年退職されました島原政司先生、勝岡洋治先生、谷川允彦先生に名誉教授の称号を、また、金山萬里子先生に功労教授の称号が授与されました。

第５回（平成22年度）伊藤奨学基金授与式

日　時：平成23年３月８日（火）午前11時～
場　所：本館図書館棟１階　学長室

平成22年度　第４学年　平松　敦
平成22年度　第３学年　柏谷　貴之
平成22年度　第３学年　城　玲央奈



第６回（平成22年度）鈎奨学基金授与式

日　時：平成23年３月８日（火）午前10時～
場　所：本館図書館棟１階　学長室

『鈎奨学基金研究助成賞』
生命科学講座解剖学教室
講師　伊藤　裕子
『鈎奨学基金学術奨励賞』
平成22年度 第３学年　青木　邦江
平成22年度 第４学年　玉川　美緒

研修医が選ぶ平成22年度の「ベスト研修医賞」の受賞について

二年目の研修医のうち基本的な診療能力（態度、技能、知識）や医療人として必要な基本姿勢・態度に優れ、代表として最もふさわしい人物として研修医全員が選ぶ、平成22年度「ベスト研修医」に吉川紋佳研修医が選ばれました。吉川研修医には３月30日に挙行した研修修了式において木下病院長より賞状と記念品が贈呈されました。

なお、記念品の商品券は全額を東北地方太平洋沖地震の義援金として寄付されました。

研究助成金等について

■平成23年度　学術研究振興資金（若手研究者奨励金）［日本私立学校振興・共済事業団］

研　究　課　題　名	氏名（所属名・職名）	助成金額
動的構造情報に基づく銅・TPQ含有アミン酸化酵素の反応解析	村川　武志（生化学・助教）	50万円

■平成23年度　共同研究課題［岡山大学資源植物科学研究所］

研　究　課　題　名	氏名（所属名・職名）
Ca^{2+}シグナルに着目した強光ストレス応答反応の分子機構に関する研究	原田　明子（生物学・講師）

■平成23年度　共同利用研究（外来研究員）［東京大学大気海洋研究所］

研　究　課　題　名	氏名（所属名・職名）
トゲウオ科魚類における嗅覚関連遺伝子の適応進化に関する研究	橋口　康之（生物学・助教）

○研究協力課から処理（申請・機関承認等）しました公募助成金他のうち、内定・採択を確認できたものを掲載しています。
研究協力課へ掲載依頼のため情報提供下さったものを含めています。

平成23年度科学研究費補助金について

※平成23年度科学研究費補助金につきましては、制度改革に伴い「基盤研究（C）」「挑戦的萌芽研究」「若手研究（B）」の新規採択分の交付内定が通知されていないため、次号にて掲載予定です。（平成23年4月7日現在）

平成22年度　第Ⅱ回　学位記授与式

日　時：　平成23年３月25日（金）　15時～
場　所：　別館１階講堂（階段教室）及び３階大学院多目的講義室
大学院医学研究科修了者（甲）……　24名
論文提出者（乙）……　12名

番　　号	氏　　名	論　文　題　名
甲第868号	朝井　　章	Pathogenic Role of Macrophages in Intradermal Infection of Methicillin-Resistant *Staphylococcus aureus* in Thermally Injured Mice （重症熱傷マウスモデルのMRSA皮膚感染におけるマクロファージの役割に関する検討）
甲第869号	今西　将史	Lethal effects on blood and lung during acute respiratory distress after inhalation exposure of rats to aerosolized hydrofluoric acid （ラットにおけるフッ酸エアロゾル吸入曝露後の血液、肺への致死影響）
甲第870号	大井　幸昌	Morphology and infectivity of virus that persistently infected in AGS cell line （AGS細胞系に持続感染しているウイルスの超微形態構造と感染性について）
甲第871号	苅田　正子	Does advanced-stage endometriosis affect the gene expression of estrogen and progesterone receptors in granulosa cells? （重症子宮内膜症が顆粒膜細胞においてエストロゲン及びプロゲステロン受容体の遺伝子発現に影響を及ぼしているのか?）
甲第872号	川茂　聖哉	An association study of the signal transducer and activator of transcription 6 gene with periodic psychosis （シグナル伝達性転写因子6遺伝子と周期性精神病との関連研究）
甲第873号	河野　敦子	Significance of Fecal Deoxycholic Acid Concentration on Colorectal Tumor Enlargement （大腸腫瘍増大に対する便中胆汁酸濃度の意義）
甲第874号	木村　光誠	Comparative proteomic analysis of the ribosomes in 5-fluorouracil resistance of a human colon cancer cell line using the radical-free and highly reducing method of two-dimensional polyacrylamide gel electrophoresis （RFHR二次元電気泳動法を用いた、ヒト大腸癌細胞株5-FU耐性におけるリボソームの比較プロテオーム解析）

番　　号	氏　　名	論　文　題　名
甲第875号	佐々木智康	糖尿病マウス左心室肥大モデルを用いた圧負荷左心室リモデリング過程における糖尿病の影響 （Diabetic hearts fail to compensate for pressure overload in a mouse model of transverse aortic constriction）
甲第876号	佐野　寛行	Exendin-4, a Glucagon-Like Peptide-1 Receptor Agonist, Suppresses Pancreatic β-Cell Destruction Induced by Encephalomyocarditis Virus （グルカゴン様ペプチド-1受容体作動薬exendin-4は脳心筋炎ウイルスにより誘導される膵β細胞破壊を抑制する）
甲第877号	白澤　邦征	Survival and changes in physical ability after coronary revascularization for octa-nonagenerian patients with acute coronary syndrome （85歳以上の患者における急性冠症候群に対する経皮的冠血管形成術施行後の生存率・日常生活動作の変化）
甲第878号	関島　龍治	Impact of platinum-based chemotherapy on the progression of atherosclerosis （白金製剤併用抗癌剤治療の動脈硬化に及ぼす影響についての研究）
甲第879号	田中　良道	Prognostic effect of epidermal growth factor receptor gene mutations and the aberrant phosphorylation of Akt and ERK in ovarian cancer （卵巣癌における上皮成長因子受容体遺伝子変異とAkt、ERKリン酸化の予後への影響）
甲第880号	谷田　会里	Urinary Scandium as Predictor of Exposure: Effects of Scandium Chloride Hexahydrate on Renal Function in Rats （暴露指標としての尿中Sc濃度測定：ラット腎機能に対する塩化Scの影響）
甲第881号	辻　　洋志	Effects of sodium monofluoroacetate on glucose, amino-acid, and fatty-acid metabolism and risk assessment of glucose supplementation （モノフルオロ酢酸ナトリウムの糖、アミノ酸、脂肪酸代謝への影響及びグルコース補充に対するリスク評価）
甲第882号	恒遠　啓示	Topotecan as a molecular targeting agent which blocks the Akt and VEGF cascade in platinum-resistant ovarian cancers （白金製剤耐性卵巣癌におけるAkt/VEGFをターゲットとした分子標的薬としてのトポテカンの機能解析）
甲第883号	日浦　結衣	5-Aminolevulinic acid-mediated photodynamic therapy to superficial malignant skin tumors using Super Lizer （スーパーライザーを用いた表在性皮膚悪性腫瘍に対するALA外用PDT）
甲第884号	平松　　亮	Application of a novel boronated porphyrin（H_2OCP）as a dual sensitizer for both PDT and BNCT （新規ホウ素化ポルフィリン（H_2OCP）の光線力学的療法・ホウ素中性子捕捉療法双方への適応）
甲第885号	広田　千賀	Association between the Trail Making Test and physical performance in elderly Japanese （日本人高齢者におけるTrail Making Testと身体機能の関連について）
甲第886号	藤田　太輔	Role of extracellular signal-regulated kinase and AKT cascades in regulating hypoxia-induced angiogenic factors produced by a trophoblast-derived cell line （トロホブラスト由来細胞株における低酸素下での血管新生関連蛋白産生の制御）
甲第887号	伏谷　英朗	Differential display of the basic protein in 5-fluorouracil resistance of human colon cancer cell line using the radical-free and highly reducing method of two-dimensional polyacrylamide gel electrophoresis （RFHR2次元電気泳動法を用いた、大腸癌細胞株における5-FU耐性に関連する塩基性蛋白の解析）

学位記授与式

番　　号	氏　　名	論　文　題　名
甲第888号	松尾　純子	Involvement of NADPH oxidase and protein kinase C in endothelin-1-induced superoxide production in retinal microvessels （網膜微小血管におけるエンドセリン-1による活性酸素産生と、NADPHオキシダーゼおよびプロテインキナーゼCの関与）
甲第889号	松田　拓久	Inhibitory effects of T/L-type calcium channel blockers on tubulointerstitial fibrosis in obstructed kidneys in rats （尿管結紮ラットモデルにおけるT/L型カルシウム拮抗薬とL型カルシウム拮抗薬による尿細管間質の線維化抑制効果の比較検討）
甲第890号	宮田　至朗	CT imaging of transferrin targeting liposomes encapsulating both boron and iodine contrast agent by CED to F98 rat glioma for boron neutron capture therapy （F98ラットグリオーマモデルにCED法を用いて投与したホウ素中性子捕捉療法用薬剤（ホウ素化合物およびヨード造影剤同時包埋トランスフェリン標的リポソーム）のCT画像）
甲第891号	宮村　昌利	Effects of Acarbose on the Acceleration of Postprandial Hyperglycemia-Induced Pathological Changes Induced by Intermittent Hypoxia in Lean Mice （食後高血糖により惹起される病理学的変化の間歇的低酸素による増強に対するα-グルコシダーゼ阻害薬の効果）

番　　号	氏　　名	論　文　題　名
乙第1082号	中平　淳子	The neutrophil elastase inhibitor attenuates respiratory deterioration after replacement of the descending thoracic aorta with deep hypothermic cardiopulmonary bypass （好中球エラスターゼ阻害薬は、超低体温体外循環を用いた胸部下行大動脈人工血管置換術の術後呼吸障害を軽減する）
乙第1083号	藤本　俊雄	Bone Reactions around Pure Titanium Implants in Rats Fed Low-calcium Diet （低カルシウム食飼育ラットにおける純チタン製インプラント周囲の骨反応について）
乙第1084号	大塚　宏治	Enhanced expression of the ubiquitin-proteasome system in the myocardium from patients with dilated cardiomyopathy referred for left ventriculoplasty: An immunohistochemical study with special reference to oxidative stress （左室形成術を施行された拡張型心筋症患者心筋におけるユビキチン−プロテアソーム系の発現亢進：特に酸化ストレスに関する免疫組織化学的研究）
乙第1085号	法橋　　明	Habituation in prepulse inhibition is affected by a polymorphism on the NMDA receptor 2B subunit gene（GRIN2B） （統合失調症患者におけるプレパルス抑制の馴化はNMDA受容体2Bサブユニット遺伝子（GRIN2B）多型の影響を受ける）
乙第1086号	尾方　章人	Proteomic Analysis Regarding Resistance to Anticancer Drugs Using a 5-Fluorouracil-Resistant Human Gastric Cancer Cell Line and The Radical-Free and Highly Reducing Method of Two-Dimensional Electrophoresis （5-fluorouracil耐性ヒト胃癌細胞株を用いた抗がん剤耐性にかかわるプロテオーム解析―radical-free and highly reducing二次元電気泳動法による検討―）
乙第1087号	木村　吉宏	Delivery of Sodium Borocaptate（BSH）to Oral Cancer by Transferrin-PEG-Liposome, for Boron Neutron Capture Therapy（BNCT） （Transferrin-PEG-Liposome をもちいた口腔癌へのSodium Borocaptate（BSH）の送達　―硼素中性子捕捉療法（BNCT）を目的に―）

番　　号	氏　　名	論　文　題　名
乙第1088号	有島　武志	Effect of levo-thyroxine replacement on postprandial hyperlipidemia in patients with subclinical hypothyroidism （潜在性甲状腺機能低下症患者の食後高脂血症に対するlevo-thyroxine補充療法の効果）
乙第1089号	村井　基修	Asymptomatic acute ischemic stroke after primary percutaneous coronary intervention in patients with acute coronary syndrome might be caused mainly by manipulating catheters or devices in the ascending aorta, regardless of the approach to the coronary artery （急性冠症候群症例に対する直接的経皮的冠動脈形成術後に発生する無症候性急性脳虚血は、主に上行大動脈でのカテーテルもしくはデバイス操作により生じ、アプローチ部位には影響されない）
乙第1090号	崎中　　勲	Diagnostic imaging study of the relationship between the mandibular third molar and mandibular canal －Use of helical computed tomography for multiplanar reconstruction－ （下顎智歯と下顎管との関係に関する画像診断学的研究　―ヘリカルCTの多断面再構成画像を用いて―）
乙第1091号	河合　　英	Intestinal Ischemia Reperfusion and Lipopolysaccharide Transform a Tolerogenic Signal into a Sensitizing Signal and Trigger Rejection （腸管虚血再潅流障害とLipopolysaccharideは寛容シグナルを感受性シグナルに変え拒絶に向かわせる）
乙第1092号	渡邉　　久	An Investigation of the Expression of Epigenetic-Related Genes in Gastric Cancer （胃癌におけるエピジェネティックス関連遺伝子の発現に関する検討）
乙第1093号	島原　　理	Bone Changes in the Condylar Head and Mandibular Fossa in Patients with Temporomandibular Disorders －Helical CT Observation－ （顎関節症患者における下顎頭ならびに下顎窩の骨変化について　―ヘリカルCT所見を中心に―）

平成23年度 事業計画および予算の概要

Ⅰ．背景と方針

［1］事業計画立案の背景

（1）世界の背景

世界的な背景としては、平成19年８月に始まった国際金融市場の動揺は、平成20年９月のリーマンブラザーズ破綻、平成21年５月のギリシャショックにより一段と深刻化、世界的な金融危機に陥った。これに伴い、世界経済は急速に後退していったが、昨年あたりからアジア新興国、次いで欧米の先進国を中心に回復の兆しが見えてきた。

平成22年以降、世界経済は緩やかなペースの回復に向かうと思われた。つまり、中国、インドなど新興国では、外需に加え内需も拡大し始めており、今後も持続的な経済成長が見込まれ、米国、日本など先進国は、新興国向けの輸出拡大による企業収益の回復が、雇用・所得の改善を経て、個人消費など内需の底入れに繋がると思われた。

しかし、平成23年３月11日に発生した東日本大震災による被害ならびに原発問題が、世界経済の不安要因となっているため、今後の動向には引き続き十分な注意が必要となった。

（2）日本の背景

日本の背景については、海外需要の増加を背景に、輸出は増加傾向を維持し、また国内においては、車や家電などの補助金制度や政策効果が功を奏し、加えて物価下落により実質的な購買力が高まる中、個人消費は底堅く推移している。企業部門も、これに伴う収益の持ち直しを受け、前向きな動きが見られる。

ただし足元の金融環境は、ギリシャ問題を発端に、世界的な株安やユーロ安の進行など不安定な動きとなっている。今後については、米中経済が回復傾向を辿ることで、輸出の増加が続き、民間部門の前向きな動きは腰折れしないと思われる。また家計部門も、雇用・所得環境の改善を反映して、総じて底堅く推移すると見込まれたが、ここにきて東日本大震災の影響が大きな不安定要素となった。

一方医療政策では、平成18年度には△3.16％という史上最大のマイナス改定となり、その後も抑制政策は継続されたが、平成21年の抑制政策からの転換によって、平成22年度の診療報酬改定は＋0.19％と10年振りのプラス改定となった。具体的な配分を決定する中医協では、急性期病院の勤務医負担軽減と経営改善のため、財源の大半を入院診療に当てることを決定したことで、急性期病院・特定機能病院への医療収入としては追い風となった。

医師不足の問題は、厚労省が医師偏在説を採り、絶対数の不足を認めることがなかったために、大きな社会問題となった。そのため政府も漸く平成20年６月「安心と希望の医療確保ビジョン」を打ち出し、「医学部定員削減」の閣議決定の見直しを実施することで、10年間の期限付きではあるが、医師養成数の増加へと政策転換がなされることになった。ただし医師養成については、定員増が期限付きであることを念頭において対応する必要がある。

加えて、女性の社会進出が著しく、医師の世界にも多くの優秀な女性が働くようになった。しかしながら、結婚、出産、育児に際して、医療現場で働くこととの両立が困難であり、医療現場から去らざるを得ない現状もあり、このことが医療現場で医師が不足する一因であるとも言われている。また、一度医療現場から離れてしまうと復職が困難であり、パート制や当直無しなど、女性にとっ

て働きやすい勤務制度を採る医療機関も出てきているが、まだまだ少数で、更なる対策が求められている。

少子化の問題については、国立社会保障・人口問題研究所の「総人口の将来推定」によると、日本の人口は2050年に中位推定では約１億人、低位推定では約9,200万人になるとされている。2100年には中位推定すら約6,500万人、低位推定では約4,600万人となってしまう。危険的なことであるが、このままいくと中位推定は避けられない状況である。

少子化の日本経済への影響は、まず労働人口が減少し、特に30歳未満の若年労働力人口が、これから2015年までに500万人と約30％も減少。30～59歳の層でも150万人が減少すると予測される。将来的に外国人労働者に頼るのか、働く女性が辞めずに子供を育てていくかの選択となる。よって、労働市場の規制緩和をせざるを得ない可能性は極めて高い。

次に、経済規模の縮小。30歳未満の若年労働者が減るということは、消費者としても減少することであり、消費市場の縮小も影響として大きい。子供関連産業、教育、レジャー及びサービス業の売り上げが悪化し、医療業界への影響も避けては通れない。

３番目に、社会保障負担の増加の問題。厚生労働省推計によると、社会保障費は2005年に100兆円、2010年には127兆円と税収入の約４倍、2025年には207兆円になるとされおり、今後、教育・医療関係への国民や行政の考え方ならびに補助や社会保障の対応も、現状とは大きく内容が変わらざるを得ないと推察される。

その上、今般の東日本大震災により甚大な被害が発生し、国の予算が災害復興にシフトするものと考えられるので、経常的な補助金の大幅な増加は望まない方が安全である。

それ以上に、今回の東日本大地震による日本社会への打撃は、予想をはるかに超える規模であり、よって今後の本邦の政治・経済・金融情勢の方向性は不安定かつ不安な情勢となり、現時点では各方面に与える悪影響は計り知れない状況にある。

また、今後の建設においては、今回の大震災により、超高層建物（20階建て以上）にした場合、今より一層厳しい耐震基準が適用される可能性もあり、本法人の建物高層ビル化の是非についても、今後十分に検討していく必要がある。

（３）本法人の背景

本法人の設立目的を改めて申し述べると、「教育基本法及び学校教育法に従い、医科大学その他の教育施設を設置し、国際的視野に立った教育・研究及び良質な医療の実践を通して、人類の福祉と文化の発展に貢献する人材を育成すること」である。

本法人は、学校法人設立以来この設立目的に従い、80有余年に亘り粛々と学校運営を進めてきた。

この本法人の営みを、これからも永々持続させるためには、設備施設の充実も一つの重要な背景、ファクターとなるが、その面で本法人が近年力を入れてきたのが「建物整備」である。本法人の建物が、既存病棟を中心に建築後30～40年経つことを勘案すると、現在の事業計画において「中長期的な観点での建物整備が必要不可欠であること」は言うまでもない。

幸い、本法人は、平成16年に地元行政をはじめ、関係各位の深いご理解と並々ならぬご努力を賜り、内閣総理大臣を長とする都市再生本部より「都市再生緊急整備の政令指定」（平成16年５月12日付け）を受けた。その目的は、本法人が大学・附属病院を建て替えることにより、教育研究・医療機能を充実強化し、市民への開放や良好な都市空間の形成に資する施設設備を進め、その機能の充実を図ることであった。

この整備計画に従い、本法人はこれまでに病院既存棟の改修整備ならびに病院７号館、看護専門

学校・看護学部校舎、新講義実習棟の各新築工事を行ってきた。そして次の計画としては、病院建物全体の建て替えが考えられる。即ち、現状新耐震基準で建設された病院建物は７号館だけで、他はしかるべき時期に建て替えなければならない。基本的には、外来診療棟、中央棟、病棟の３棟で形成し、大学附属病院に求められる機能を効率良く配置したい。ただし、建て替えに際しては、本部キャンパスのみならず、広く候補地を検討する必要がある。また、本部キャンパス内で建て替えるにしても、次期建て替えも視野に入れ、緩衝地を配置できるように設計する必要がある。

この計画を将来に向け実現すべく、着工時期は未定であるが、現在基本計画の作成に必要な情報を収集している。しかし、この大規模かつ長期間に亘る病院の建て替えを開始するには、多額の資金を要し、そのためには「相当な額の自己資金を確保すること」そして「借入金の返済能力を確実に有すること」が必須である。ただ、現状の本法人の財政収支状態では、自己資金を確保することや借入の返済金を捻出することは不可能である。

よって、今後の事業計画を推し進めるためには、この状況を一刻も早く全学を挙げて克服し、本法人における財務の帰属収支差額を大きくプラスに好転させる見通しが絶対条件となる。そしてこれを実現させるには、言わずもがな、収入増加と費用削減の実施しかなく、現在それに向けた経営改善を行なっている。具体的には、病院収入の増加、また必要最低限の設備投資や医療経費節約による費用削減を実施している。

そして、予算統制も漸く実行の緒に付いた。今後は「財政基盤を磐石」にして、帰属収支差額が安定的に５億円以上は確保できる組織体質を作り上げ、将来に亘って本法人が発展し続ける基盤を作って上げていくことが、今の本法人に課せられた重要な使命と考える。

また今後、本法人が生き残っていくために、どうしても考えなければならない背景が、将来を展望した時に「単科大学であることの是非」である。本法人は平成21年度に「看護学部」を設置し、脱単科大学への道を歩み始めると同時に、看護基礎教育に関する財政の赤字脱却を目指した。また文部科学省も、単科大学同士の合併には前向きの意向を示しており、その手助けも表明している。そのような状況下、本法人は、近隣にある「大阪薬科大学との深い連携」を模索し始め、両校で検討に入った。ただ、この連携には数々の課題事項があり、両校でその問題を解決していくには相当な時間を掛け、ステークホルダーの意見を聞きつつ、慎重に対応していくことが必須であると考える。

さらに、理事会が主体的に経営に関与して、本法人の最高決定機関としての機能を発揮させる方針を、この時期に改めて出した背景も意義深い。法人、大学、病院が三位一体となり、経営を動かしていく土壌作りがなされた。特に担当理事制を引き、職務担当をその理事が責任を持って実行する仕組みができたことは、経営改善の面からも大いに有意義なことである。

そして、医療環境の変化が激しい現状、本法人も今後の病院のあり方を十分に検討しなければならない。そのことが病院建築の具体的なプロセスに繋がっていく。

現在、本法人が抱える問題は前述した、

①財政の磐石化

②新病院ならびに新校舎等の建設（新耐震基準化）

以外にも山積している。中でも、

③教育機関としての大学ブランド力の維持

④大学院の充実（医学研究科博士課程の定員充足、医学系研究科前期後期課程ならびに看護系研究科前期後期課程の設置）

⑤事務部門の体制強化（事務局の設置）

などは重要な課題である。

いずれも長期的な期間の猶予を持って実現を目指す課題というより、その対応を急ぐ課題も多いが、その実現には全学的な意見形成を行わなければならず、本法人としても、一つ一つ慎重かつ時間を掛けて対応していくことが必要であると考えている。

［2］事業計画立案の方針

以上の背景を踏まえ、平成23年度は以下の事業計画案の方針を立てた。

本法人が、現状大変厳しい財政状況下に置かれていることは、色々な場面で繰り返し説明してきた通りである。特に、ここ５年間の帰属収支差額は、平成20年度は僅かながらプラスとなったが、それ以外の年度は大幅な赤字を計上している。この状況も鑑み、現理事長は就任にあたり、所信表明で「財政基盤の強化」として「あらゆる手段を講じて財政の磐石化を図る」と全学に向かって指示があった。

当然のことであるが、本法人の財政が安定しないと、教育・研究・診療などを充実させる投資ができない。

本法人の財政が大きく悪化した原因を言うと、本法人は平成16年度から現在に至るまで、都市再生事業計画案に沿って、本学・本院の建物新築や附属病院の大幅な改修工事を行った。それに費やした設備資金は、総額で100億円以上に達し、本法人にとっても過去に例がない巨額の投資となった。その投資効果は、相応の成果も出しつつ評価も得ている。しかしこの投資が、本法人の財政を圧迫したのは紛れもない事実である。よって今後数年間も引き続きこの投資による収益効果を上げることが肝心な時期であり、ここ数年は現有設備を最大限に有効活用し、将来に備えての設備拡充資金の積み立てを図ることが最も重要な課題である。そのためにも平成23年度は建設等の設備投資を大幅に押さえた。

病院の収益確保及び業務管理の強化に向け、平成22年度に理事会直轄の「病院経営改善委員会」が作られた。これは病院収支が20～21年度に亘り、各々10億円弱の赤字を計上し、また入院、外来部門ともに赤字という状況下、今後の病院建て替えや機器購入などの設備投資を行うためには、病院収支の改善なくしては有り得ないという認識のもと、理事会直轄の委員会として、理事長が委員長に、病院長が副委員長になり立ち上がった。今後、病院収入の増加対策は勿論のこと、病院施設の様々な投資、システム構築、医療機器の購入などについても本委員会で議論され、各診療科ともヒアリングを行いながら、全体方針を定めていくことになる。

そのような状況下にあって、予算については、帰属収支差額と次年度繰越支払資金の目標額確保を最優先に、各事業内容を精査し、実施項目を決定した。

平成23年度予算で収入においては、NICUなど新施設稼動での収入増、また改善委員会で話し合われた項目などによる増収を見込んだ。支出においては、保留可能な事業への投資を極力押さえ、リースなども駆使しながら、借入等の負債額の増加を抑制する。また医療機器への投資は、優先順位が高く、かつ採算性の確保できるものに限定して行うこととした。

今後、将来の病院建物・校舎等の建て替えを考慮しつつ、本法人が所有する校地の活用や処分性を考える必要もある。近々の校地の動きとしては、平成24年度に八丁畷キャンパスと府営住宅跡地との等価交換が実施される。

大阪薬科大学との連携・合併については、平成23年度にもさらに協議を重ね、より構想の検討を深めることになる。

ただ、今回突然未曾有の災害をもたらした東日本大震災は、本法人の中長期事業計画の遂行にも少なからず負の影響を及ぼすと考えられる。即ち、日本の社会情勢に与える打撃は相当甚大であり、今後の政治・経済・金融などが不安定化することは想像に難くない。このような状況も考慮すると、本法人が今後多額な資金を投入する建築やシステム整備の実施、あるいは大学の統合の計画などは、これからの社会情勢を十分に見据えつつ、従来にも増して慎重な検討と判断が必要となる。

なお、平成23年度の項目毎の主な計画と課題は、以下の項目がある。

○校地　・各キャンパスの有効利用計画案策定
　［北西、西（含、府営住宅跡地）、さわらぎ、城北］

○校舎等　・新病院建築（建替）計画案策定
　・建物修繕計画策定
　・手術室増室案策定、一部実施
　・保育施設改善案策定

○設備等　・病院オーダリングシステム更改
　・フィルムレス基幹システム更改
　・法人ＩＴシステム更改
　・医療機器購入計画策定
　・医学部教務情報システムの再構築

○組織　・事務機構改革（事務局制度導入など）
　・予防医学研究機構構築
　・予算編成委員会の設置
　・看護専門学校閉鎖記念事業
　・法人合併検討

○運営　・病院運営方向性策定
　・病院経営改善具体策実施
　・大学経営改善具体策実施
　・大学院教育内容改善
　・医学部教育内容改善
　・大学情報公開の恒常的運用方法策定
　・新人事制度、新考課制度、新給与体系案の策定
　・個別権限基準確立
　・電子決済、届出運用開始
　・省エネルギー対策強化開始

○経営・財政　・予算管理システム（新予算編成）の策定
　・細部署別収支の確立
　・帰属収支差額確保
　・次年度繰越支払資金確保
　・建物新築拡充資金の積立案策定

Ⅱ　平成23年度 予算の概要

［1］予算編成の基本方針

（1）基本的な考え方

教育・研究・診療を維持発展できるよう、限られた収入財源を計画的且つ効率的に予算配分することにより、帰属収支差額を黒字化させ、累積消費支出超過の状況を改善することを基本的な考えとした。

（2）予算編成方針

［基本財務計画］

目標指標：帰属収支差額を対平成21年度比10億円以上改善すること。（財務の健全化）

必達指標：繰越支払資金を30億円（前受金勘定を除く）以上維持すること。（資金繰り改善）

（3）収入面

寄附金、補助金、医療収入等収入予算は、平成22年度予測値を上回るものとするが、過大積算しない。

（4）支出面

「財務の健全化」と「資金繰り改善」のため、帰属収入を基にした事業計画の選択と集中を行うこととし、安全性の確保・緊急性の対応および法令遵守以外の新規予算要望は、必要最小限の範囲で計上した。

固定費抑制のために、義務的経費を除き中期計画の一環として、前年度実績△５～10％の経費削減を予算原案として各部署に通知した。

施設および設備の予算要望は、中長期経営計画に基づくもの以外は全て予算措置を繰り延べ、事業の必要性や採算性を再検討し、投資効果が最大限に得られる範囲とした。

医療関係設備は、短期的な採算性と長期的な戦略要素から中期整備計画を基にした機器の更新と新規機器導入を検討し、大学附属病院として真に必要な整備計画の範囲内とした。

支出面全般については、東日本大震災の影響による物価変動等、不確定要因が大きい。

［2］平成23年度 予算の概要

（1）資金収入

『**学生生徒等納付金収入**』は、平成21年度からの医学部定員増、平成22年度の看護学部設置および看護専門学校募集停止の増減の要因を取り入れた予算を計上している。また、医学部入学時の特待生制度による入学時納付金の減免ならびに看護学部入試成績上位者給付奨学金を加味し予算化している。

『**手数料収入**』は、入学検定料を主な内容としており、医学部一般入試（前期・後期）および大学センター試験ならびに看護学部の出願者動向を予想し予算計上している。

『**寄付金収入**』は、「附属病院の機器や研究施設の整備事業の募金」を予算計上している。本学の教育・研究の充実やインフラ整備を図るための「大阪医科大学基金」を継続的な募金活動として、その寄附見込額を予算計上した。

『**補助金収入**』は、「キャリア形成支援センター（H20～24）」「メディカルトレーニングサポートセンター（H21～23）」「高度周産期医療人養成推進プログラム（H21～25）」「平成23年度最終年度の医工薬連環科学」「がんプロフェショナル」「優れた知識と技能を兼ね備えた良医を育てる医師力強化プログラム」の継続分を計上した。

『**資産運用収入**』は、新たに愛泉寮跡地4,611㎡の貸地料を計上した。テナント等施設設備賃貸料、

駐車場料収入、マンション賃貸料は、前年度実績を基に予算を計上した。

『**資産売却収入**』は、職員宿舎（メゾン水無瀬）の不動産売却を予算計上した。

『**事業収入**』は、LDセンターや保育所の補助活動収入と治験を中心とした受託事業収入を予算計上した。

『**医療収入**』は、診療報酬改正の年度ではないが、平成22年度医療収入（見込額）に６億円を加算した。NICU、GCU設置による加算額を見込むとともに、平成22年７月に発足した理事長を委員長とする病院経営改善委員会の収支改善による成果を見込んだ。第三者機関による病院経営分析結果を基に入院平均在院日数の短縮、手術室の効率的な運用、地域医療連携の強化などによる目標値の実現に向け、戦略的かつ実効性の高い計画を、ローリング方式で見直すことになった。

『**借入金**』は、平成23年度新規事業に係る資金および賞与資金として予算計上した。

（２）資金支出

『**人件費**』は、給与改定を定期昇給のみとし、ベースアップ額は予算計上していない。新規採用計画、人事派遣法制度強化による直接雇用人件費を「委託費」から「人件費」に変更して予算計上した。今後の給料改定および賞与支給率は、病院の経営改善ならびに平成23年度収支目標の達成状況により検討することとした。

『**教育研究経費および管理経費**』は、収支の均衡を失しないよう調整した。

主な編制内容は、次のとおりである。

- 医療材料費は、医療収入に対する経費率を対21年度比△1.8％にした予算を計上した。
- 賃借費は、リース取引（所有権移転外ファイナンスリース）に関する会計処理の変更や看護師マンションの縮小などから増額はない。再リース契約により、総合医用画像情報システム、放射線治療システムなどは、これまでの賃借費を減額計上することができた。
- 修繕費は、体育館防水工事、北西キャンパス防水工事、共同利用会館防水工事など老朽施設の改修予算を計上している。今後は、修繕を要する施設の実情調査により概算額を積み上げ、中短期の修繕計画を立てた施設整備費の予算計上が求められる。
- 委託費は、設備や機器等の保守費、手数料がいまだ増加傾向に歯止めが効かず、経費削減ができていない。年々増え続ける保守費および人件費に相当する役務費など、課題を残す予算編成となった。特に、業務のIT化導入に伴い、追加的に発生する保守費は経常的費用として年々増加しており、決算への影響が大きく、IT化の費用対効果について計画的な検証が求められる。手数料の新規分として、医学部教務系システム開発費、駐車場管理業務委託料、病院経営改善コンサルティング料を予算計上した。なお、外注検体検査業務委託費、オーダリングシステム更改に伴う関連費については減額した。

『**借入金等返済**』は、平成18年度「医学科学生生活支援制度充実のための学校債」償還金の予算を計上した。

『**設備関係支出**』は、看護学部設置経費、優れた教育の設備ならびに教育研究費、病理学教室感染予防対策用解剖台、放射線治療計画用CT装置、総合医用画像情報システム更新、ITシステム統合更新、勤怠管理システム更新、病院玄関法定掲示物電子化などの費用を予算計上した。老朽化医療機器更新計画にある乳房撮影装置、血管撮影装置など高額機器更新予算は、次年度以降に繰り延べした。医療機器整備の予算として新しく「病院経営改善委員会分」を新設し、医療機器整備予算として対前年度予算に加算し予算計上した。資金ストックの枯渇を招かないよう過剰な設備投資を避け、設備投資額と減価償却額を勘案し、消費収支の均衡に配慮した予算内容にした。

『**施設関係支出**』は、老朽施設の再生、新たな教育研究ニーズによる施設の狭隘化の解消、大学附属病院整備などの大規模な計画については、安全性の確保・緊急性の対応および法令遵守を優先させ、必要最小限の範囲とした。

なお、総合研究棟照明設備改修、病院２号館エレベータ改修、昨年度繰り延べした自動火災報知設備監視システム構築については予算計上した。また、４年計画で進めていた総合研究棟の冷暖房空調設備改修は本年度で完成する。リハビリテーションセンター・小児科・形成外科等の病棟周りの外来等診療区域改修工事、病院７号館３階改修工事、保育所改修工事などは、中長期計画の観点から施設整備投資の効果と事業の必要性を検証し、計画の一部を次年度以降の事業計画に変更した予算とした。

『**資産運用支出**』は、本法人の退職年金の将来的給付の財源に充てる資金として通常拠出金に新たな拠出金額を加算した額を、退職年金引当特定預金へ繰り入れする予算を計上した。

『**予備費**』は、予算編成時において資金支出や消費支出の予期しない支出に対処するための予備費を増額計上した。

（３）繰越支払資金

必要な資金（業者支払金や人件費）を担保する支払資金は、最低限を確保している。施設設備の更新・拡充事業のための資金は取得時以上に必要となり、資金保有量を減少させる一因となっている。平成23年度予算編成において、大型の施設や設備の投資計画は、財務の健全性と将来計画との調整を行い安全性確保と緊急性の対応のみとし資金留保に配慮した。しかし、前年度予算と同様、設備拡充引当資産や退職給与引当特定預金の積み上げの予算編成はできていない。

（４）帰属収入

法人運営に必要な消費支出の財源となる帰属収入は平成22年度予算対比3.7％アップとなっており、医療収入では5.2％アップを見込んでいる。医療収入の帰属収入割合は77.3％であり、医療収入が法人全体の事業計画の決定を左右している。

自助努力の安定財源による法人運営に必要な消費支出の財源確保が必要であり、平成23年度においては、病院経営改善委員会による医療収入増収分を、帰属収入目標予算として加算計上している。

（５）消費支出

学校法人の全ての支出のうち、人件費の増加、教育研究経費と管理経費の増加、支払い利息、資産の減価償却額の増加などにより、消費支出が抑制できていない。消費収入と消費支出は、均衡状態ではなく、このような状況が長期的に生じること自体、本法人の永続性を脅かすことになる。経費の無駄をなくす目標設定を行い、消費収支（差額）の均衡計画と実行を法人全体が一丸となって取り組まなければ消費支出の抑制は不可能である。

（６）帰属収支差額

法人が黒字か赤字かを判断する目安である帰属収支差額については、基本方針である「対平成21年度比10億円以上の改善」は達成できた。平成23年度予算編成では、法人の負債とならない収入で人件費や諸経費などを何とか賄える内容となったが、累積消費支出超過額の改善までには至らない予算編成内容となった。

以　　上

平成23年度　収支予算

消費収支予算

（単位：千円）

消費収入の部				消費支出の部			
科目	平成23年度予算額	平成22年度予算額	増減(△)	科目	平成23年度予算額	平成22年度予算額	増減(△)
学生生徒等納付金収入	3,880,360	3,720,590	159,770	人件費	14,712,727	14,413,724	299,003
手数料収入	174,497	171,349	3,148	教育研究経費	13,118,146	12,951,175	166,971
寄付金収入	524,632	575,000	△ 50,368	管理経費	2,130,216	2,181,184	△ 50,968
補助金収入	1,560,112	1,556,007	4,105	借入金等利息	73,297	89,358	△ 16,061
資産運用収入	223,382	262,231	△ 38,849	資産処分差額	51,190	11,307	39,883
資産売却差額	0	0	0	徴収不能額	16,810	23,345	△ 6,535
事業収入	293,488	295,975	△ 2,487	予備費	300,000	100,000	200,000
医療収入	23,574,059	22,414,956	1,159,103				
雑収入	332,485	430,752	△ 98,267	消費支出の部合計	30,402,386	29,770,093	632,293
帰属収入合計	30,563,015	29,426,860	1,136,155				
基本金組入額合計	△ 1,401,400	△ 1,349,500	△ 51,900				
消費収入の部合計	29,161,615	28,077,360	1,084,255	当年度消費収支超過額	△ 1,240,771	△ 1,692,733	451,962

資金収支予算

（単位：千円）

収入の部				支出の部			
科目	平成23年度予算額	平成22年度予算額	増減(△)	科目	平成23年度予算額	平成22年度予算額	増減(△)
学生生徒等納付金収入	3,880,360	3,720,590	159,770	人件費支出	14,666,607	14,388,360	278,247
手数料収入	174,497	171,349	3,148	教育研究経費支出	11,558,586	11,123,065	435,521
寄付金収入	514,632	565,000	△ 50,368	管理経費支出	1,999,386	2,029,547	△ 30,161
補助金収入	1,560,112	1,556,007	4,105	借入金等利息支出	73,297	89,358	△ 16,061
資産運用収入	223,382	262,231	△ 38,849	借入金等返済支出	1,238,720	1,088,470	150,250
資産売却収入	10,000	0	10,000	施設関係支出	160,343	360,027	△ 199,684
事業収入	293,488	295,975	△ 2,487	設備関係支出	1,278,859	1,585,575	△ 306,716
医療収入	23,574,059	22,414,956	1,159,103	資産運用支出	104,368	55,500	48,868
雑収入	332,485	430,752	△ 98,267	その他の支出	2,440,271	3,008,216	△ 567,945
借入金等収入	1,000,000	500,000	500,000	予備費	300,000	100,000	200,000
前受金収入	2,275,140	2,050,665	224,475				
その他の収入	4,074,438	4,154,054	△ 79,616				
資金収入調整勘定	△ 5,964,992	△ 6,174,546	209,554	資金支出調整勘定	△ 3,595,527	△ 3,624,904	29,377
前年度繰越支払資金	4,451,299	5,285,451	△ 834,152	次年度繰越支払資金	6,173,990	5,029,270	1,144,720
収入の部合計	36,398,900	35,232,484	1,166,416	支出の部合計	36,398,900	35,232,484	1,166,416

注：資金収支・消費収支両予算に共通する科目で予算額に差異のある科目については下記の理由による。

1.「寄付金」には，資金収支上の寄付金のほかに，消費収支予算では現物寄付金が計上されている。

2.「人件費」には，支払給与のほかに，資金収支予算では退職金支出額が計上されているのに対し，消費収支予算では退職給与引当金繰入額が計上されている。

3.「教育研究経費」「管理経費」には，資金収支予算上の支払経費のほかに，消費収支予算ではそれぞれに減価償却額が計上されている。

海外春期短期研修生の派遣について

中山国際医学医療交流センター長　**河野　公一**

本学では国際交流推進の一環として、医学部学生・教員の海外研修を積極的に行っていますが、今年２月から５月にかけて、交流協定などに基づき下記の各大学に本学学生を派遣しました。

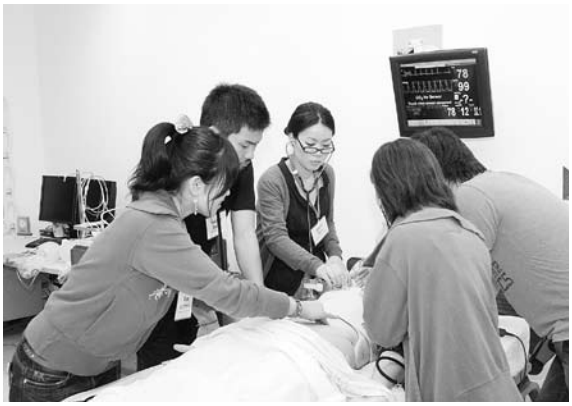
◆米国ハワイ大学PBLワークショップ
研修期間　平成23年３月６日～３月11日
派遣学生　城玲央奈さん（３年生)、横川愛さん（３年生)、森本貴子さん（３年生）
今城幸裕君（５年生)、井上亮君（５年生)、酒井美恵さん（５年生）＊学年は派遣時の表記です
◆米国ハワイ大学院外選択臨床研修
研修期間　平成23年２月28日～３月25日、平成23年５月２日～５月27日
派遣学生　６年生　浜畑好昌君、岩井謙治君
◆タイ・マヒドン大学シリラート病院臨床研修
研修期間　平成23年３月28日～４月８日
派遣学生　６年生　須賀佑磨君、林秀幸君、中野和俊君、古曽部和彦君
◆韓国カソリック大学臨床研修
研修期間　平成23年４月11日～４月29日
派遣学生　６年生　文元聰志君、今城幸裕君、井上亮君、根来孝義君

以下に春期研修内容について、米国ハワイ大学PBLワークショップに参加した城さんとタイ・マヒドン大学シリラート病院臨床研修に参加した林君に感想を述べていただきました。（他の14人の感想文は中山国際医学医療交流センターホームページに掲載予定です。）

ハワイ大学ワークショップに参加して

３年生（現４年生）　**城　玲央奈**

この度、ハワイ大学医学部主催のClinical Reasoning Workshop（３月７日～11日）に参加しました。


身体所見の取り方の練習中

臨床推論のワークショップということで、１～３日目はそれぞれ胸痛、呼吸困難、腹痛をテーマに午前中は問診と身体所見のとり方のレクチャーをしっかり受け、午後から実際に模擬患者さんを相手に診察を行いました。その診察の様子はビデオ撮影されており、後から自分の診察の様子を見直すことができました。自分のビデオを他の参加者の前で見直すのは最初は恥ずかしく感じられましたが、良い点・悪い点を客観的に評価できるとともに自分では気付かない点も指摘してもらえるため、そこから多くを学ぶことができました。

今回のワークショップには大阪医科大学を含むハ

ワイ大学の提携校に加えて、個人応募や野口医学研究所の選考を突破した日本全国からの医学生が参加していました。自分と同じような目標を持った彼らが豊富な知識と高いモチベーションを持つのみならず、人一倍努力する姿を見て、自分も負けていられないと思いました。この様にレベルの高い他大学の医学生と交流ができたことも、このワークショップで有意義だった体験の一つだったと思います。

ワークショップ４日目の夜に東北地方太平洋沖地震が発生し、ハワイでも津波警報が発令されました。海沿いでは津波警報のサイレンが鳴り響き、翌日も海に面した医学部のキャンパスは封鎖となり、最終日の授業は中止になりました。日本で起きた地震が遠いハワイにまで影響を及ぼしたことから、その被害の大きさを痛感させられたのを覚えています。

最後に、今回のワークショップに参加する機会を与えてくださった河野教授、花房教授、鈴木教授、PA会の皆様、中山センターの松本さん、そして丁寧に指導してくださったSakai先生、Omori先生、ハワイ大学医学部の学生の皆さん、地震発生のときには徹夜で対応してくださったMargitさん、Rayさん、その他お世話になった方々に心から感謝いたします。

タイ・マヒドン大学シリラート病院臨床研修に参加して

６年生　林　秀幸

この度、マヒドン大学付属シリラート病院で、病院実習を約２週間の間に参加する機会を与えていただきました。現地でのtrauma surgery外傷外科での実習についてお話ししたいと思います。

EXTERN（６回生）にタイ語で通訳してもらいながら患者の手を消毒

シリラート病院はタイの医学校の中でも最も歴史のある大学でRoyal Familyが訪れるRoyal Hospitalでもあります。想像以上に大きく広大な土地には病院関連の建物が建ち並び、一つのコミュニティーを形成していました。

外傷外科は外傷を負った患者さんに医療を行う部門で、日本で言う整形外科と形成外科、救急の３つを足し合わせたような科でした。また、Hand、FFC（顔の骨）、BURN（熱傷）と３つのUnitに分かれていて、専門性の高い治療が行われていました。

OPD（外来）では、主にexternと呼ばれる６回生が中心となって治療にあたり、診断から消毒、縫合、抜糸、石膏の型どりなどを中心に臨床実習していました。指の切断など形成の技術が必要とされるような難しい症例の患者さんが来た時や診断自体が難しい時はレジデントにかわってもらったり相談したりして対処していました。

シリラート病院ではバンコクの中で唯一外傷外科だけで独立したope roomをもっており、外傷によるものを中心に熱傷から人口肛門造設に至るまで幅広い手術が行われていました。ERは常に空けてあって緊急で運ばれて来た時にのみ使われ、手の空いている者が全員で駆けつけて急患に対応するのだそうです。

留学生の実習は学生の自主性に全て任されていて、いつでも行きたい所に行って見たいものを好きなだけ見ることができるというものでした。しかしどこでどういう疾患を見ることができて何をやらせてもらえるのかがよく分からなかったので、６回生に話を訊いて実習内容を決めました。朝７時の回診が終ってからは

外来で過ごし、６回生と、消毒、縫合、抜糸、石膏の型どり、局所麻酔などを、一つ一つ丁寧に教えてもらいながらやらせてもらいました。Hand, FFC, BURNなどの特別な診察や講義が行われているときは学生と一緒に参加。レジデントや学生達、そして教授もタイ語が全くわからない僕が回診、講義、手技などの内容を納得し、実際にできるようになるまで英語で丁寧に教えてくれました。タイでは医学書はタイ語のものはほとんどなくほぼ全て英語で書かれているのですが、大半の学生が英語を話せました。

いつも気を配ってくださっていたレジデントの先生にopeがある時は見学をしたいとお伝えしていたところ、opeがある時に声をかけて連れて行ってくださり、見ているだけではなく、いろいろなことを実際にさせてもらえました。

患者さんはタイの交通事情を反映してバイク事故が最も多い印象をうけました。次に多かったのが、animal bitesです。タイでは至るところに野良犬が寝そべっており、治療時には狂犬病の予防もなされていました。その他にも銃で撃たれた患者さんや、感電、転倒、転落など日本ではなかなか見ることができない疾患例を数多くみることができ、医療とはその国、地域に根付いたものであることを改めて実感しました。

Night shiftでは夕方４時くらいからの回診が終ってからそのまま引き続いて外来が行われていました。患者さんは昼までと違い子供の数が増えて10時くらいにピークを迎えます。しかし12時を過ぎてからはほとんど来なくなるので僕がシフト実習をした時には学生同士で色々な話で盛り上がったりしました。雨の日は交通事故が多いため忙しくなるそうです。

シリラートの６回生の実習はいつ寝ているのかわからないくらい非常にハードなものでした。朝６時半から縫合などの練習をして７時からは回診、翌日の夕方４時まで外来で過ごすといったことをグループ交代制でやっていました。彼らの勉強や医療に対する姿勢を見て、これからの自分の大学生活の参考にしていきたいと思いました。

特に初めの一週間は日本からの留学生が僕一人だったせいもあったと思いますが、自分達も非常に忙しい中で彼らは常に僕のことを気にかけてくれました。勉強や実習以外にも彼らといろいろな話をしたおかげで毎日多忙な実習も楽しく、お陰で貴重な臨床／訓練体験をさせてもらっただけではなく素晴らしい友人達に数多く出会うことができた実習になったと思います。彼らには言葉で言い表せない程感謝の気持ちでいっぱいです。

僕個人としては外傷外科の場合は少なくとも実習期間は２週間はあったほうがいいのではないかと思います。外傷外科の内容は多岐にわたりますし、やらせてもらえる事や見る事ができるものも数多く、また２週間いたからこそ現地の学生と別れがつらくなるほど仲良くなれたのではないかと思います。

今回の実習で彼らの考えた方や異国の文化に触れることができたのは、僕にとって大きな財産になったと思います。そして国外から日本の医療を見直すことができ視野が今までより広くなったのではないかと思います。これらの経験を残りの学生生活、医師になってからも役立てていきたいと思います。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった河野教授、花房教授、鈴木教授、そして留学の手続きなどいろいろと配慮してくださった中山センターの今尾さん、松本さん、経済的援助をしてくださったＰＡ会の方々、シリラート病院でお世話になった、先生方、学生達、一緒に実習にいった、古曽部君、中野君、須賀君、及びすべての方々に深く感謝いたします。

本当にありがとうございました。

アメリカ在住60年メイヨクリニック岡崎春雄名誉教授の本学来校について

看護学部長　林　優子

岡崎春雄先生は、1951年に大阪大学医学部をご卒業後まもなく渡米され、現在はアメリカ合衆国ミネソタ

州ロチェスターにあるMayo Clinic College of Medicineの名誉教授を務めておられます。聖路加国際病院理事長・日野原重明先生とは親交の深い間柄です。神経病理がご専門の先生はMayo Clinic にて脳外科や神経内科、精神科のレジデントに対して臨床に役立つ神経病理の教育に力を注いでこられ、また長期にわたりMayo Clinicへの日本人留学生・研修生のために多大な教育的配慮をされて来られました。この度、本学来校期間中に教育センターレクチャーシリーズで「神経病理・解剖（Neuropathology）からみたレジデントの教育について―MAYO　CLINICの経験から―」について講演していただき、また、中山国際医学医療交流センターよりHonorary Professorの称号を受けられました。

※平成23年３月25日に予定しておりました国際シンポジウムは、東北地方太平洋沖地震の影響により、中止いたしました。

■第一回看護実践研究センター研究報告会開催

看護実践研究センター長　田中　克子

平成23年度３月11日（金）13時～16時まで、第一回看護実践研究センター研究報告会が看護学部講堂で開催されました。当日のプログラムは、第一部は「看護実践研究センター開設にあたり」林学部長、「学部共同研究について～大学における実践と研究」副センター長前田教授の講演でした。第二部は研究報告会で、看護学部全教員による研究課題９題の発表とプログラムの最後にフリーデスカッションの時間を設けました。当日は、実習施設等から27名の参加があり、参加者から報告会の内容に関しても興味関心をもった、出来れば一緒に共同研究を行いたいという意見もいただきました。看護実践研究センターの設立使命は、大学をはじめ、外部機関及び地域社会における看護実践の課題に関する研究を推進するとともにその成果を発信することです。このような報告会に実習施設の方に参加いただくことで看護学部の教育・研究の取り組みを発信していくという本センターの役割の一端をようやく実現できたのではないかと思っております。今後、地域の方との交流・連携の糸口を開くきっかけとなることを希望しております。

当日は東北地方太平洋沖地震による災害が起こり、報告会途中に会場内が揺れましたが無事に終了することができました。地震の惨状については報告会後、知ることになりました。この場をお借りして犠牲者の皆様に深い哀悼の意を表します。

■臨床研究教育研修会開催

日　時：平成23年１月24日（月）17：30〜19：00
場　所：P101教室（新講義実習棟１階）
演　題：臨床研究の基本的枠組みと国際動向
講　師：京都大学大学院医学研究科
　　社会健康医学系専攻　健康解析学講座
　　薬剤疫学分野　教　授　川上　浩司　氏

去る１月24日（月）、「臨床研究教育研修会」を開催いたしました。

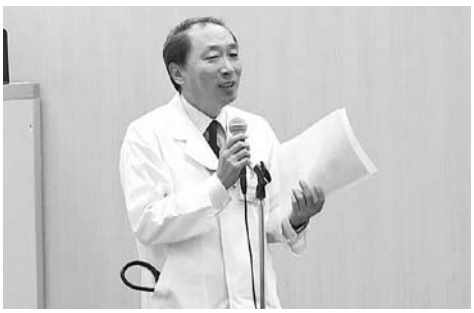
平成21年に施行された「臨床研究に関する倫理指針」において、“研究者等は、臨床研究の実施に先立ち、臨床研究に関する倫理その他臨床研究の実施に必要な知識についての講習その他必要な教育を受けなければならない”が明記されました。これを受け、大学院医学研究科および臨床治験センターでは、臨床試験（治験）をはじめとする医学的研究に携わる医療従事者を対象に、臨床研究に関する研修会を企画しています。今回は、FDA（アメリカ食品医薬品局）で医薬品審査官の経歴をお持ちの、京都大学大学院医学研究科薬剤疫学教授の川上浩司先生を講師にお迎えいたしました。

林臨床治験センター長の司会のもと、米田大学院委員会委員長による開会挨拶の後に川上先生が登壇されました。ご講演では、日本で薬事承認を取得するためには「治験」というルートを通らなければならず、研究者達の臨床試験データがいくら存在しても申請用としては利用できない現状、つまり「治験」と「臨床試験」という二重構造が開発時間と経費の莫大な損失を引き起こし、その結果、医薬品・医療機器の創出力の低下という負の連鎖を誘引していると指摘されました。アメリカ、ヨーロッパで一元化されている薬事承認を例に挙げ、日本においてもGCP遵守の下、治験と臨床試験を統合して活性化させることが、国民、研究者、日本の将来にとって最も望ましい姿であると締めくくられました。

質疑応答の後、最後に閉会挨拶として林臨床治験センター長より同先生への謝辞等が述べられ、約90名の参加者を得て盛会のうちに終了しました。

次年度につきましては、７月25日（月）、平成24年１月23日（月）に開催予定です。追ってご案内いたしますので、是非ともご参加いただきますようお願いいたします。

米田大学院委員会委員長



林臨床治験センター長

平成22年度卒業証書・学位記授与式

日　時：平成23年３月４日（金）14：00～
場　所：高槻現代劇場　中ホール
　　医学部医学科卒業生　103名

■平成22年度　卒業式　告辞

学長　**竹中　洋**

大阪医科大学第60期生の皆様、本日ご卒業おめでとうございます。また、保護者の皆様にも心よりご子息、ご息女のご卒業をお慶び申し上げます。大阪医科大学にとりまして、卒業式は入学式とともに最も重要な学事でございますが、本日、関西医科大学山下敏夫学長先生始め、ご列席頂いております多くのご来賓の皆様に教員並びに卒業生を代表して御礼申し上げます。

さて、卒業生の皆様が大阪医科大学に入学された前後数年の出来事で医学医療と関係の深いものを整理しますと、

1．平成15年には診断群分類に基づく医療が大学附属病院を中心とした特定機能病院に課せられています。この制度によって、予め病名や治療方針が定まって入院をすることが原則とされました。その結果、在院日数が短縮されただけでなく、医師の説明責任や治療の標準化が大きく進展しました。
2．平成16年には新医師臨床研修制度が導入され、多くの医師国家試験合格者が附属病院以外に研修の場を求めました。この流れは今も続いています。
3．平成17年は個人情報保護法が全面実施されました。個人情報保護法の導入は医療にも非常に大きな変革をもたらしました。症例検討や報告などの医学系教育や研究で、可能な限り匿名化が義務とされました。また、紹介元や紹介先への情報提供にも患者さんの同意が必要であります。皆様は学生時代に診療録の取り扱いを中心に厳しく指導を受けたと思いますが、今後は医師として、個人情報保護法の精神の具現化、即ち自らが接する患者さん一人一人の権利を守る立場からの言動が求められます。
4．平成17年４月にはJR福知山線の脱線事故で100名を超える尊い命が失われました。残念ながら、この20年間に関西は２度、日本の優れた医療提供体制であっても、地震や交通災害などに瞬時に対応することの難しさを体験しました。何よりも災害医療の構築が重要と叫ばれていますが、財政問題など

もあって、広域救急医療は遅々として進まない状況にあります。

一方、平成20年にはがん対策基本法が、平成21年には肝炎対策基本法が実施され、法律によって医療提供の在り方や医師の責務が定められています。このように社会の動静と医療は正に不可分の時代に突入したと言えます。

医学教育も教室や講座単位で実施されていた専門科の個別的な講義型式からPBLチュートリアル方式が広がり、本学でも教育センターや教育機構が学部教育の中心的役割を果たすようになっています。教育の質は担保され、教員が全体として教育に参加する利点はありますが、指導的な立場にある教員と学生諸君の接触機会は減少した感もあります。特に臨床系では病院実習以外に教授や准教授との接触機会が少なくなったと思われます。加えて、５年生から６年生への進級判定などの教育評価上の問題も生じてきています。大阪医科大学では順次見直しを進めている段階です。

また、大学院医学研究科の実質化に向けた見直しも着実に進んでいます。来年度には大学院教員組織が立ち上がります。将来、大阪医科大学は医学部６年間に留まらず、卒後研修から大学院までを含む、医学・医療の基盤を支えるキャリア形成を行うことを目的として活動を進めています。

このように、制度も学問体系も社会環境も変わる中で皆様は医師の道を目指し、本日、大阪医科大学から羽搏こうとされています。その門出に際し、私は学長として「do your best！」の言葉を贈りたいと思います。健康であり続けることは万人の希望であります。しかし、医師は「残念ながら病を得た人たち」の側にいます。科学が発展した今日であれ、理不尽に、想い半ばに倒れるのが人間の定めとすれば、医師たるもの惜しみなく時間と知識と技術を病める人に捧げる気持ちが必要です。また、懸命に生きようと、努力を続ける人達を評価しなければなりません。皆様は何れ疲れとストレスから皆様自身が力尽きようとしているときに、皆様を励ましてくれる患者さんに出会うことになります。自らができる最善の努力をすることが人の信頼に応える道であります。

先日来、大学入試に関連して不正な行為が行われたとの報道があります。余りにも進んだIT機器や情報システムの負の部分を見た感が致します。本日の朝日新聞の朝刊にも述べられていましたが、「知識の外注化」が社会の根底にあることが懸念されます。勿論、最新の知識を得られる特性はインターネット社会の共通の利益であります。しかし、職業人として当然身に付けねばならない知識を人任せにすることまでは許されていません。所謂コピペなるものは、本来の知識人には論外のものであります。自ら考え自律した医師として歩まれることを切望致します。

皆様の医師としての成長は我々教員にとって大きな喜びであります。どうぞ選択された各々の道で立派に夢と希望を実現されますことを切に希望致します。

また、保護者の皆様には改めてご子息ご息女のご卒業をお祝い申し上げるとともに、これまで注がれた深い愛情と大阪医科大学へのご理解に心より敬意を表したいと思います。最後に大阪医科大学と大阪医科大学の教職員は、卒業されても何時も皆様と一緒にありたいと念じておりますことを申し上げます。

これをもって学び舎を旅立たれる第60期生の皆様への学長告辞と致します。

平成22年度　看護専門学校卒業式・謝恩会

平成23年３月９日

穏やかな春の日差が感じられるこの日、看護学科26回生73名の晴れの卒業式が挙行されました。

卒業式では植木理事長を始め多くの学内外からの来賓をお迎えし、高槻市保健福祉部保険医療室・田村室長に、奥本高槻市長からの祝辞を代読していただき、竹中学長や木下病院長からも暖かい祝辞をいただきました。看護部長からはスイートピーの大きな花束を頂戴致しました。

答辞では総代が「四月、桜のつぼみが一つまたひとつと開花しうす桃色に色づく頃、私達はそれぞれの想いを胸に新しい道を歩み始めます。看護師として患者様に看護ができることに喜びや期待を感じる反面、高度化する医療の中で専門的知識や看護技術が活用できるか不安になります。しかし、看護に限界はないと思って患者様を第一に考え、辛い闘病生活に安らぎを与えられるように精一杯の看護を実践していきたいと思います。」と堂々と述べてくれました。

夕刻からの高槻京都ホテルでの謝恩会では、卒業式の白衣姿とは打って変わり、袴あり、振袖ありの晴れやかな変身ぶりでした。お世話になった講師の先生や、看護部長、臨床の指導者の方々と、思い出を語り合ったり、メッセージをいただき、和やかな感謝のひとときを持つことができました。

看護学校での３年間の基礎看護教育課程を自信にして、一人ひとりの熱い看護への思いを胸に、思い切り羽ばたいてくれることを願っています。

平成23年度　医学部新入生学外合宿

平成23年度の「医学部新入生学外合宿」が、「ラフォーレ琵琶湖」（滋賀県守山市）において、新入生109名、教職員約30名の参加のもと、４月６日（水）～８日（金）の２泊３日にわたり実施されました。

新入生たちは、与えられた課題に対するグループ討議、救急蘇生座学・体験学習、レクレーション、懇親会等を通じてお互いの親睦を深めました。

平成23年度　看護学部新入生学外合宿

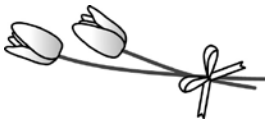
看護学部第２期生の「新入生学外合宿」は、「大阪国際ユースホステル」（高石市）において、４月７日（木）～８日（金）の１泊２日で実施されました。

新入生88名は、豪華なバーベキューや研修「信頼関係を築くゲーム」「大阪医科大の歴史と特徴」「心肺蘇生AED講習」に積極的に参加、楽しみながら教職員とも親睦を深めました。今回の研修は救急医学の西本准教授やライフサポートクラブの協力もあり、医看融合の手がかりを感じた合宿でした。

平成23年度　医学部　白衣授与式

日　時：平成23年４月28日（木）午後３時30分～
場　所：臨床第一講堂

臨床の現場へ出て行く第５学年105名に対し、医療人としての意識と責任感を新たにすることも含めて、学長、病院長、教育機構長、教育センター長より白衣が授与されました。



平成23年度　職員入職式

日　時：平成23年４月１日（金）午前９時30分～
場　所：臨床第一講堂

看護部97名、技師・事務職等31名、計128名の入職式が行われました。

理事長の挨拶に続いて辞令が交付され、病院長の挨拶、臨席者の紹介が行われました。

平成23年度　市民公開講座

■第１回

平成23年４月16日（土）14時～　臨床第一講堂

『花粉症とうまく付き合う』
耳鼻咽喉科　講師　寺田　哲也

『花粉症のお薬との上手な付き合い方』
附属病院薬剤部　戸矢　亜衣子

『花粉症の方の日常生活におけるセルフケア』
附属病院　耳鼻咽喉科外来看護師主任　福　末子

平成23年度　市民公開講座　開催予定

回数	開催日	演　　題	担当部署	薬剤部　演題 看護部　演題	講演薬剤師 講演看護師
第２回	５月21日（土）	循環器の治療 －最近の考え方－	第３内科 教授　石坂信和	降圧薬はどのようにして血圧を下げるのか？	高橋智恵子
				循環器疾患における日常でのセルフケア	東　典子
第３回	６月18日（土）	消化管がんに対する内視鏡治療	消化器内視鏡センター 准教授　梅垣英次	ヘリコバクタピロリーのお薬について	小笠原明美
				内視鏡治療前後の食事と日常生活	澤田亜里香
第４回	９月17日（土）	消化器がん化学療法の進歩	化学療法センター 講師　後藤昌弘	抗がん剤治療のつらさを抑えるお薬について	細見　誠
				抗がん剤治療を安心して受けるために	有田由美
第５回	11月19日（土）	”肺がんなんてこわくない” 肺がんの治療について	胸部外科 講師　花岡伸治	分子標的薬って何？	浦嶋和也
				肺がんで手術後に日常生活で気をつけたいこと	上田育子
第６回	12月17日（土）	前立腺がんの放射線治療	放射線医学 教授　猪俣泰典	前立腺がんの痛みを抑えるお薬との付き合い方	後藤愛実
				前立腺がんと日常生活	長驛美奈子
第７回	平成24年 １月21日（土）	遺伝のはなし -遺伝子検査でどこまでわかる？-	臨床検査医学 講師　宮﨑彩子	お薬の効く人と効かない人の違い	山崎浩平

平成23年度　高槻市大学交流センター事業『市民講座』開催予定

開催場所：高槻市総合市民交流センター７階・第６会議室

開催日時	所　　属	講　演　者
10月13日（木）16：30～	衛生学・公衆衛生学	講師　谷本　芳美
10月20日（木）16：30～	看護学部	教授　荒木　孝治
10月27日（木）16：30～	臨床治験センター	センター長　林　哲也 治験コーディネーター　原　亜由美

■主な行事日程（平成23年６月～８月）

６月１日（水）	創立記念日
８日（水）	医学部教授会・医学研究科委員会・診療科長会・看護学部教授会
14日（火）	理事会
15日（水）	医学会総会・春季学術講演会
18日（土）	平成23年度第３回市民公開講座
19日（日）	看護学部オープンキャンパス（第１回）
22日（水）	医学部教授会
29日（水）	病院運営会議
７月６日（水）	医学部教授会・医学研究科委員会・診療科長会
12日（火）	理事会
13日（水）	看護学部教授会
16日（土）	医学部夏期休業（～８月28日まで）
17日（日）	医学部オープンキャンパス（第１回）・看護学部オープンキャンパス（第２回）
20日（水）	医学部教授会
21日（木）	看護専門学校夏期休業（～８月31日）
27日（水）	病院運営会議
８月９日（火）	理事会
11日（木）	看護学部夏期休業（～９月30日）
24日（水）	病院運営会議
28日（日）	医学部オープンキャンパス（第２回）・看護学部オープンキャンパス（第３回） 看護学部第３回

東日本大震災義援金について（報告）

学校法人 大阪医科大学
理事長　植　木　　實

平成23年３月11日に発生いたしました東日本大震災は、わが国にとりまして未曾有の大災害となりました。

この世界でも類を見ない大災害で被災されました多数の方々に対しまして、心からお見舞いを申し上げます。

さて、法人では、被災された多くの人々の一日も早い復興を願い、大震災義援金募集を去る３月14日から31日までの間、実施いたしました。

これまでに多くの方々から義援金が寄せられ、その総額は3,382,583円になりました。この義援金につきましては、日本赤十字社を通じて災害地の方々に送られる予定です。ご理解、ご協力を賜りました多くの方々に厚く感謝申し上げます。

なお、締め切り以後の義援金の受付に関しましては、継続して財務部会計課で行っております。被災地の復興には長い時間と多額の資金が必要となります。皆様の温かいご支援をよろしくお願いいたします。

■ 別館講堂「机募金」応募状況について

＜寄付金申込者＞

平成23年１月１日から平成23年４月10日までの間の寄付金入金件数は１件、金額は1,200,000円です。

ここに寄付金申込みをいただきました方に感謝申し上げます。

なお、募集当初から平成23年４月10日までの寄付金入金件数は38件、金額は14,700,000円です。

匿名１件

■ 新学部設置事業寄付金の応募状況について

＜寄付金申込者＞

平成23年１月１日から平成23年４月10日までの間の寄付金入金件数は１件、金額は100,000円です。

ここに寄付金申込みをいただきました方に感謝申し上げます。

なお、募集当初から平成23年４月10日までの間の寄付金入金件数は96件、金額は28,271,000円です。

匿名１件

■ 教育環境整備事業寄付金の応募状況について

＜寄付金申込者＞

平成23年１月５日から平成23年３月30日までの間の寄付金入金件数は５件、金額は4,008,000円です。

ここに寄付金申込みをいただきました方々のご芳名を掲載させていただき感謝の意を表します。

なお、募集当初から平成23年３月30日までの寄付金入金件数は80件、金額は167,438,000円です。

（順不同・敬称略）

吉村　宅弘　　鈴木　康道　　西本　　孝　　匿名１件

■「別館」・「歴史資料館」維持事業に係る寄付金の応募状況について

＜寄付金申込者＞

平成23年１月５日から平成23年４月10日までの間の寄付金入金件数は１件、金額は50,000円です。

ここに寄付金申込みをいただきました方のご芳名を掲載させていただき感謝の意を表します。
なお、募集当初から平成23年４月10日までの寄付金入金件数は23件、金額は3,483,460円です。

（敬称略）

日下　孝明

■ 附属病院の整備事業寄付金の応募状況について

＜寄付金申込者＞

募集開始から平成23年３月31日までの間の寄付金入金件数は53件、金額は8,250,000円です。
ここに寄付金申込みをいただきました方々のご芳名を掲載させていただき感謝の意を表します。

（順不同・敬称略）

日本エア・リキード株式会社関西地域本部　神戸掖済会病院　医療法人社団英明会大西脳神経外科病院
株式会社フロリスト花正　東洋紙業高速印刷株式会社　医療法人和敬会
社会医療法人山弘会上山病院　社会保険紀南病院　医療法人医仁会武田総合病院
株式会社関西繃帯材料製造所　かんまきＡＢＣ薬局　都市クリエイト株式会社
医療法人寺西報恩会長吉総合病院　医療法人社団洛和会洛和会音羽病院　医療法人藤井会石切生喜病院
ユウキ産業株式会社　社会医療法人信愛会　医療法人社団蘇生会　医療法人社団光風会長久病院
医療法人恒昭会

礒田　洋三	成松　正治	田原　一也	鶴長　建充	佐々木伸一	鈴木元太郎	福本　攻
子日　光雄	井上　泰	神谷　鉾彦	中田　勝次	郡　義彦	門永義三郎	波多腰正隆
齊藤　治	吉川　幸弘	槇野　茂樹	平井　博	門田　雅人	福田　泰樹	匿名13件

■ 大阪医科大学基金の応募状況について

＜寄付金申込者＞

平成23年１月５日から平成23年４月10日までの間の寄付金入金件数は61件、金額は2,527,000円です。
ここに寄付金申込みをいただきました方々のご芳名を掲載させていただき感謝の意を表します。
なお、募集当初から平成23年４月10日までの間の寄付金入金件数は273件、金額は35,009,000円です。

（順不同・敬称略）

医療法人蒼生会蒼生病院　医療法人毅峰会吉田病院　株式会社エス・ビー・エム

日下　孝明	田原　一也	森　浩志	成松　正治	大野　浩二	谷川　允彦	臼田　寛
平井　実	勝岡　洋治	村上　澄子	大野　博司	袖岡　秀幸	井口　健	森本真佐子
木村　正士	金森ひろ子	山口みゆき	森本　純司	金田　恵孝	小牟田美幸	吉田さとみ
濱本由美子	森安　朋子	守本　俊子	山川　由加	大槻　勝紀	米田　博	池本　敏行
植田　政嗣	出坂　秀雄	西本　泰久	石川　俊明	辻　求	奥田　準二	南　敏明
西村保一郎	朝日　通雄	寺井　陽彦	荻野　一子	竹内　淑恵	高井　七重	澤村　律子
藤岡　重和	門田　雅人	礒田　洋三	大槻　哲彦	佐野　浩一	國澤　隆雄	小林　紹泉
西山　裕子	工藤　清	神谷　鉾彦	西尾　元	島田　瑞夫	大井　幸昌	匿名１件

※これまで恒常的なご寄付はフレンズ会で承っていましたが、現在は「大阪医科大学基金（通称・フレンズ基金）」で承っております。今までどおり恒常的なご寄付を賜りますようお願いいたします。

＜寄付金に関するお問合せ＞

募金推進本部
TEL：072-684-7243(直通)　FAX：072-681-3723
E-mail：kikin@art.osaka-med.ac.jp

主要会議報告

■主要会議とその主な議題（平成23年２月～平成23年４月）

【理事会】

〔平成23年２月９日〕

―審議事項―

１．大阪医科大学学則の一部改正について
２．平成21年度大学改革推進等補助金（周産期医療環境整備事業（NICU等設置）（平成21年度選定分））の返還について
３．学校法人大阪薬科大学との連携について

―報告事項―

１．理事委員会委員の選任について
２．担当理事運営会議報告
３．日本私立医科大学協会理事会報告
４．病院経営改善委員会報告
５．学事関係報告
６．病院関係報告
７．その他

〔平成23年３月８日〕

―審議事項―

１．理事の選任について
２．大阪医科大学学則の一部改正について
３．平成23年度予算について
４．学校法人大阪薬科大学との連携について

―報告事項―

１．監事について
２．担当理事運営会議報告
３．学事関係報告
４．病院関係報告
５．財務諸表の公開について
６．「イダイ薬局」への申入書について
７．製薬企業からの奨学寄附金問題について

〔平成23年３月30日〕その１

―審議事項―

１．平成23年度事業計画及び予算の概要について
２．平成23年度予算について
３．監事候補の選出について
４．評議員の選任について
５．大阪医科大学大学院医学研究科教授会規程の制定について
６．大阪医科大学医学部教授会規程の一部改正について
７．学校法人大阪医科大学予算規程の一部改正について
８．学校法人大阪薬科大学との連携について

―報告事項―

１．平成22年度資金収支決算見込報告書について
２．泌尿器科学教授選考に係る選考結果
３．担当理事運営会議報告
４．日本私立医科大学協会理事会報告
５．学事関係報告
６．病院関係報告
７．ケタラールに関する大阪府知事宛の始末書の提出について

〔平成23年３月30日〕その２

１．平成23年度事業計画及び予算の概要について
２．平成23年度予算について

【評議員会】

〔平成23年３月30日〕

―審議事項―

１．平成23年度事業計画及び予算の概要について
２．平成23年度予算について
３．監事の選任について
４．学校法人大阪薬科大学との連携について

―報告事項―

１．平成22年度資金収支決算見込報告
２．その他

【大学協議会】

〔平成23年２月28日〕

―協議事項―

１．大阪医科大学情報公開委員会（通称：IR委員会）規程（案）について
２．大阪医科大学英文雑誌発行規程（案）について
３．学内規程検討委員会について
４．その他

〔平成23年３月28日〕

―協議事項―

１．大阪医科大学英文雑誌発行規程（案）について
２．大阪医科大学新研究科設置検討委員会報告
３．看護学部の教育業績の様式について
４．その他

〔平成23年４月25日〕
―協議事項―
１．大阪医科大学新研究科設置検討委員会報告
２．医学部・看護学部間の教員の兼務状況について
３．医学部・看護学部の自己点検・評価組織委員会規程等について
４．その他

【大講座主任教授会】
〔平成23年４月13日〕
―審議事項―
１．感覚器機能形態医学講座の主任教授について
２．その他

【教　授　会】
〔平成23年２月２日〕
―審議事項―
１．人事に関する件
２．今後の教授選考について
　１）泌尿生殖・発達医学講座泌尿器科学教室教授選考委員会委員の選出について
　２）外科学講座一般・消化器外科学教室教授選考について
　３）感覚器機能形態医学講座口腔外科学教室担当教授の選考について
３．大学院医学研究科に係る改革について
４．大学の情報公開について
５．特別協力研究員に関する内規の改正について
―報告事項―
１．理事会報告
２．学長報告
３．市民公開講座運営委員長報告
４．教育センター長報告
５．広報・入試センター長報告

〔平成23年２月19日〕
―審議事項―
１．平成23年度医学部入学試験に関する件
２．人事に関する件
３．今後の教授選考について
　１）泌尿生殖・発達医学講座泌尿器科学教室担当教授の選考について
　２）外科学講座一般・消化器外科学教室担当教授の選考について
　３）感覚器機能形態医学講座口腔外科学教室担当教授の選考について
４．大学院医学研究科に係る改革について
―報告事項―
１．理事会報告
２．学長報告
３．中山国際医学医療交流センター長報告
４．教育センター長報告
５．その他

〔平成23年２月25日〕臨時
―審議事項―
１．平成23年度医学部入学試験に関する件
―報告事項―
１．学長報告

〔平成23年３月３日〕
―審議事項―
１．平成23年度入学試験に関する件
２．人事に関する件
３．大阪医科大学医学部教授会規程等の一部改正について
―報告事項―
１．学長報告
２．教育センター長報告
３．中山国際医学医療交流センター長報告
４．その他

〔平成23年３月16日〕臨時
―審議事項―
１．平成23年度医学部入学試験に関する件
―報告事項―
１．理事会報告
２．学長報告
３．教育機構長報告

〔平成23年３月19日〕
―審議事項―
１．平成23年度入学試験に関する件
２．人事に関する件
３．名誉教授称号授与に関する件
４．功労教授称号授与に関する件
５．第１～４学年の進級合否判定ついて
６．第４学年給付奨学生(特待生)の選考について

7．本年度末日で任期満了となる教授会での選出が必要な委員会委員の選出について
8．今後の教授選考について
　1）外科学講座一般・消化器外科学教室担当教授の選考について
　2）感覚器機能形態医学講座口腔外科学教室担当教授の選考について
9．大阪医科大学医学部教授会規程の一部改正について

〔平成23年３月23日〕臨時
―審議事項―
1．第２学年の進級合否判定ついて

〔平成23年４月２日〕
―審議事項―
1．平成23年度入学者決定に関する件
2．人事に関する件
3．本年度末日で任期満了となる教授会での選出が必要な委員会委員について
4．今後の教授選考について
　1）外科学講座一般・消化器外科学教室担当教授の選考について
　2）感覚器機能形態医学講座口腔外科学教室担当教授の選考について
5．本年３月23日開催の臨時教授会について
6．学部学生からの休学願い出について
7．学部学生からの復学願い出について
―報告事項―
1．理事会報告
2．学長報告
3．教育機構長報告
4．中山国際医学医療交流センター長報告
5．倫理委員会委員長報告

〔平成23年４月６日〕臨時
―審議事項―
1．感覚器機能形態医学講座口腔外科学教室担当教授の選考について
2．一般・消化器外科学教室、口腔外科学教室の臨時主管教授について
3．鈎奨学基金研究助成金審査委員会委員の投票結果について
―報告事項―
1．学長報告

〔平成23年４月20日〕
―審議事項―
1．人事に関する件
2．語学（英語・独語）教室、哲学教室の臨時主管教授について
3．今後の教授選考について
　1）外科学講座一般・消化器外科学教室担当教授の選考について
　2）感覚器機能形態医学講座口腔外科学教室担当教授の選考について
4．各種委員会委員等の委嘱について
5．学部学生からの休学願い出について
―報告事項―
1．理事会報告
2．学長報告
3．教育機構長報告
4．中山国際医学医療交流センター長報告

【大学院医学研究科委員会】
〔平成23年２月２日〕
―審議事項―
1．大学院医学研究科に係る改革について
2．大阪医科大学大学院学位規程施行細則の一部改正について
3．大阪医科大学研究生規程の一部改正について
4．その他、大学院医学研究科改革に係る諸規程の改正について

〔平成23年２月19日〕
―審議事項―
1．平成22年度学位論文提出のための語学試験について
2．平成23年度大学院入学試験（２月５日実施分）について
―報告事項―
1．大学院医学研究科に係る改革について
2．大阪医科大学大学院学位規程施行細則の一部改正について

〔平成23年３月３日〕
―審議事項―
１．大阪医科大学大学院医学研究科教授会規程(案)について
２．大阪医科大学大学院学位規程施行細則の一部改正について
―報告事項―
１．平成22年度医学研究科第Ⅱ回学位記授与式、及び平成23年度医学研究科入学宣誓式について

〔平成23年３月19日〕
―審議事項―
１．平成22年度第２回学位論文審査結果に基づく可(合)否決定について
２．大阪医科大学大学院医学研究科教授会規程(案)について

〔平成23年４月２日〕
―審議事項―
１．平成23年度大学院医学研究科給付奨学金の支給について
２．学外研修許可及び学外研修延長願について
３．平成22年度研究生辞退者及び平成23年度研究生(新規・継続)について
―報告事項―
１．平成23年度大学院医学研究科入学手続者について
２．平成23年度「統合講義」授業開講及び「共同利用実験施設セミナー」未履修者への受講配慮について
３．その他

【看護学部教授会】
〔平成23年２月９日〕
―審議事項―
１．海外出張予定者について
２．新研究科設置案について
３．看護学部各種委員会委員について
４．大阪医科大学情報公開委員会規程(案)について
５．保護者会開催について
６．看護学部入学試験監督者及び面接委員の選出について
７．履修規程の見直しについて
８．老年看護学地域実習ヘルプ体制について
９．看護学部DVD等管理について
10．感染症に関する内規の一部修正について
―報告事項―
１．大阪医科大学予防医学研究機構設置準備委員会発足について
２．シラバス作成について
３．日本看護系大学協議会「看護学教育評価検討委員会研修会」参加について
４．看護学部研究棟部屋割(案)について
５．大学協議会報告
６．各種委員会報告
　１）学生生活支援センター報告
　２）教育センター報告
　３）看護実践研究センター報告
　４）看護備品管理報告
　５）HP実務委員会報告
７．保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正に関する説明会について
８．その他

〔平成23年２月14日〕
―審議事項―
１．平成23年度看護学部入学試験に関する件
　看護学部センター試験利用入学試験(１次試験)の合格予定者の決定について

〔平成23年２月16日〕
―審議事項―
１．平成22年度設置経費追加(案)について

〔平成23年２月19日〕
―審議事項―
１．平成23年度看護学部入学試験に関する件
　看護学部センター試験利用入学試験(２次試験)の合格予定者及び繰り上げ予定者の決定について

〔平成23年３月４日〕
―審議事項―
１．平成23年度看護学部入学試験に関する件
　看護学部一般入学試験(後期)の合格予定者及び繰り上げ予定者の決定について

主要会議報告　入学試験・国家試験状況

〔平成23年３月16日〕
―審議事項―
１．大阪医科大学における学生・大学院生に関する個人情報保護についての基本方針(案)及び個人情報の利用目的(案)について
２．平成22年度予算執行について
３．平成22年度設置経費について
４．成績評価について
５．社会人大学院への入学について
―報告事項―
１．東日本大震災について

〔平成23年４月２日〕臨時
―審議事項―
１．平成23年度看護学部入学生の決定について
２．学部学生の学籍異動について

〔平成23年４月13日〕
―審議事項―
１．教員採用について
２．各種委員会委員の選出について
　１）法人ＨＰ委員会
　２）入試実務委員会
　３）人権教育推進委員会
３．保健師教育選択制について
４．看護専門学校同窓会と看護学部同窓会について
５．「看護ってどんなしごと？」の無料配布の中止について
６．社会人大学院入学について
７．治療過程に伴う援助技術演習時の協力要請について
８．入学時特待生候補者の決定について
９．給付奨学金候補者の決定について
10．教員の海外出張について
11．平成23年度予算について
12．平成23年度学部共同研究費の課題採択について
―報告事項―
１．保健師教育選択制に伴う学納金の見直しについて
２．大学協議会報告
３．評議員会報告
４．各種センター報告
　１）学生生活支援センター報告
　２）教育センター報告
　３）看護実践研究センター報告
５．その他

入学試験・国家試験状況

■平成23年度　入学試験状況

	志願者数(人)	受験者数(人)	入学者数(人)
医学部医学科	2,658	2,368	112
大学院医学研究科	49	48	47
看護学部看護学科	1,015	982	88

■国家試験状況

		受験者(人)	合格者(人)	合格率(%)	全国平均(%)
第105回 医師国家試験	総数	123	112	91.1	89.3
	新卒	103	103	100	92.6
	既卒	20	9	45.0	60.2
第100回　看護師国家試験		73	73	100	91.8(新卒者96.4)

第7回　臨床研修指導医養成講習会開催

臨床研修の指導体制充実を目的として第７回臨床研修指導医養成講習会を開催しました。チーフディレクターに聖路加国際病院の福井次矢病院長、チーフタスクフォースには高知医療再生機構の倉本秋理事長といった医学教育の中心におられる両先生の企画によりカリキュラムプランニングを中心とした構成で進められました。すべてのプログラムを修得された学内及び協力型臨床研修病院や臨床研修協力施設から参加した38名の先生方には本院および厚生労働省から修了証書が授与されました。

１．開催日時　　平成23年２月26日（土）午前９時30分～27日（日）午後５時00分
（実質的な講習時間　16時間）

２．場　　所　　新講義実習棟７階

３．運営組織（実施担当者）

実施責任者	木下　光雄		タスクフォース	近藤　敬一郎
チーフディレクター	福井　次矢	聖路加国際病院 病院長	〃	辻　　求
コ・ディレクター	米田　　博		〃	西本　泰久
〃	河野　公一		〃	平松　昌子
チーフタスクフォース	倉本　　秋	高知医療再生機構 理事長	〃	花岡　伸治
コンサルタント	結城　暢一	近畿厚生局 臨床研修審査専門官		

４．参加受講者

第７回講習会（38名）	
中辻　文彦	石坂　信和
佐々木有一	吉井　　章
尾崎　智康	川﨑　利博
河野　武弘	平田　裕二
星　　穣	岡　　雅行
梶本　宜永	黒川　晃夫
勝岡　洋治	中山　一郎
堤　　千春	東川　幸嗣
柚木　孝仁	奥田　龍三
髙城　武嗣	石橋　孝嗣
川本晋一郎	井上　奈緒
池田宗一郎	堀田　敏弘
小野　和英	能見　勇人
上田　晃一	李　　昊哲
上野　　浩	森信　若葉
長谷田文孝	谷村　光啓
藤立　康貴	木村　文治
古武　彌嗣	宮武　伸一
北野　勝也	―以上38名―
根本慎太郎	

＊＊＊　日本医療マネジメント学会　第４回大阪支部学術集会「医療安全におけるチームマネジメント」のシンポジストとして　＊＊＊

看護副部長　**豊田　瑞恵**

日本医療マネジメント学会はクリティカルパスを中心に、医療安全、医療連携、医療の質の向上などの情報発信を行っています。今年度は大阪支部第４回学術集会を花房前病院長が学会長として担当することとなり、2011年２月26日に本院において開催されました。

『躍動するチームマネジメント:One for all, All for one』をメインテーマに掲げ「チーム医療」をキーワードに特別講演・シンポジウムをはじめ一般演題では口演、ポスターによる54題の発表がありました。和歌山県立医科大学の畑埜義雄先生の「医療安全におけるリーダーシップ―組織コーチングとコミュニケーション―」は医療職としての基本的姿勢を再確認するうえで貴重な講演でした。また、枚方市民病院の森田眞照院長から「赤字体質からの脱却」と題して経営改革を実施するうえでのトップマネジメント力の発揮と医療安全の要である病院職員の意識改革への取り組みを学ぶことが出来ました。

私は「医療安全におけるチームマネジメント」のシンポジストとして、看護師の立場から発表しました。その中で「チーム医療の連携強化」の観点から効果的で成果のある本院での取り組みを紹介しました。その内容は安全対策室が2005年度から主催するRM（リスクマネージャー）宿泊研修での根本原因分析（RCA）のプロセスについてです。医療事故の分析ツールであるRCAを多職種（医師、看護師、薬剤師、ME、管理栄養士、放射線技士、検査技師、施設技士、事務等）で実施する過程においてのディスカッションはお互いの職種を深く理解出来る機会となり、研修後の人間関係の円滑と協力体制の強化につながっています。患者の安全を守ることは病院に働く医療職がコミュニケーションを良くし、それぞれの持てる力を発揮していくことだと考えます。

看護職への安全教育は最終医療行為者としての自覚と責任を基盤に、専門知識と安全確認の行動ができることが最も重要と考え実施しています。このことは、医療チームの中においてリアルタイムに看護師が行動し、チームをリードしていることに繋がっています。また、看護師の「安全に関する報告」数は全体の70%を占め、事例分析からの学びは患者の全体像を知っている強みからの改善点を提言しています。

患者の最も身近にいる看護師は、さまざまな情報を持っており、患者を取り巻く医療職との接点も多い。その情報を駆使した観察力、判断力、実行力がチーム医療の質に大きく影響すると言えます。

看護職のRMである看護師長は、それぞれの職種をコーディネートし医療チームが効果的に機能するマネジメント力を発揮していけるように努力していきたいと考えます。

＊＊＊　NSTと褥瘡対策室による効果的なチーム連携の取り組み　＊＊＊

摂食・嚥下障害看護認定看護師
檀上　明美

私は日本医療マネジメント学会大阪支部第４回学術集会において「NSTと褥瘡対策室対策室による効果的なチーム連携の取り組み」について発表しました。本院では平成14年に褥創対策室、平成17年に栄養サポートチーム（以下NST）が発足しました。それぞれのチームメンバーは医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士・言語聴覚士、検査技師等の多職種で構成しています。

院内研修や講演会は、両チームが連携し実施していますが、患者ケアにおいては各々のチームが単独に活動している状況でした。平成20年より皮膚・排泄ケア認定看護師１名と摂食・嚥下障害看護認定看護師１名が、それぞれのチームに加わり専門知識を生かした連携の強化に取り組みました。

その結果、NSTへの依頼件数のうち褥瘡患者への介入率は、前年度との比較において約40％増加し、栄養状態の改善が褥瘡の治癒促進に大きく貢献しました。これらのことから、「チーム医療」の重要性を再認識することができ、関連する医療チームの連携は医療の質の向上に寄与していると考えられました。今後も医療チームの連携を推進し患者の回復促進に努力していきたいと思います。

■新生感染対策室のご挨拶

昨年の私立医科大学付属病院における多剤耐性菌のアウトブレイクを契機として医療機関における感染対策が社会的に注目されました。また私立医科大学の感染対策における全国レベルの組織構築の不備も指摘され、これを受け平成23年４月１日私立医科大学病院感染対策協議会が発足しました。この会の規定をみても院内感染対策に求められるハードルは毎年高くなってきています。

そこで大阪医科大学附属病院感染対策室は平成23年４月１日からICDの大井幸昌医師、ICNの川西史子看護師、山田智之薬剤師、柴田有理子検査技師をメンバーに加えた新体制に生まれ変わりました。また体制の充実により感染対策防止加算（診療報酬点数100点またはDPC係数0.0032）を申請出来ることになりました。高いレベルの感染対策を実行して行くため、感染対策室では日々の活動の充実を図って行きたいと考えています。新生感染対策室の活動に対し、今後ともご理解とご協力の程よろしくお願い申し上げます。

感染対策室室長　浮村　聡

平成22年度　病院患者動態

	項　　目	単位	平成22年度	平成21年度	平成20年度	対前年比（％）
入院	延入院患者数	（人）	255,107.0	252,751.0	261,950.0	0.9
	（１日平均患者数）	（人）	698.9	692.5	718.0	0.9
	（新入院患者数）	（人）	15,611.0	15,282.0	15,489.0	2.1
	（病床稼働率（延））	（％）	85.5	84.4	87.6	1.2
	（平均在院日数）	（日）	15.4	15.5	15.9	0.6
外来	延外来患者数	（人）	539,642.0	530,351.0	538,270.0	1.8
	（１日平均患者数）	（人）	2,006.1	1,978.9	2,001.0	1.4
	（初診患者数）	（人）	53,040.0	53,529.0	55,025.0	－0.9
	（１日平均初診患者数）	（人）	197.1	199.7	204.5	－1.3

平成23年度採用　臨床研修医（臨床研修歯科医）

臨床研修医50名　　臨床研修歯科医３名

医療安全対策室

■医療に係る安全管理のための職員研修　第27回特別講演会

【演　題】　『内服薬処方せんの記載方法に関する安全対策』
【演　者】　厚生労働省　関東信越厚生局　医療安全対策専門管　望月聡一郎　先生
【開催日】　平成23年３月10日（木）午後５時～６時30分
【出席者】　学内関係者203名　／　高槻市薬剤師会　23名、高槻市医師会　１名
（※その他DVD上映会出席者およびDVD借用者：64名）

３月10日（木）午後５時より、臨床第一講堂、臨床第二講堂において、木下病院長の開会挨拶に続き、薬剤部長の玉井浩先生の司会により、教職員を対象に第27回特別講演会が開催された。

望月先生は自身が薬剤師と言う事もあり、非常に詳細に今回の記載方法の変更について講演された。内容としては「処方せんの記載に関する現状と課題」、「内服薬処方せんの記載方法のあり方に関する検討会」、「検討会報告書公表後の動き」が中心であった。医療安全情報の第９号や18号から引用され、記載が統一されていない事によって起こる様々なリスクを回避するための改善であること。ローカルルールを沢山作るのではなく、誰が見ても間違える事の無いルールの統一化が必要であると言われた。

最後に閉会の挨拶として、玉井薬剤部長より同先生への謝辞を述べられ、講演が盛会のうちに終了した。

■医療に係る安全管理のための職員研修　特別講演会

《救急医療部・小児科・キャリア形成支援センター・医療安全対策室　共催》

【演　題】　『医療の質と安全について－小児集中治療の観点から－』
【演　者】　米国フィラデルフィア小児病院　麻酔・集中治療科　　西崎　彰　　先生
【開催日】　平成23年３月４日（金）午後５時～６時30分
【出席者】　148名（院外医師３名を含む）

３月４日（金）午後５時より、臨床第一講堂において、米国フィラデルフィア小児病院の西崎彰先生をお招きし、教職員を対象に特別講演会が開催された。玉井浩小児科学教室教授の開会挨拶に続き、救急医療部 新田雅彦先生の司会で進行された。

西崎先生は前記病院のPICUを中心に勤務され、実体験による「医療の質と安全について」の考察を述べられた。医療従事者に必要なスキルとして「テクニカルスキル」は当然であるが、それ以外にもっと重要なスキルとして「ノンテクニカルスキル（チームワークスキル）」を挙げられた。ノンテクニカルスキルには多様な因子が含まれており、議論と理解を深める必要がある。我が国においてもノンテクニカルスキルについて医療現場で語られる機会が増えているとの現状の紹介があった。また、チームワークの重要性を強調され、「スイスチーズ・モデル」や「Ｆ１チーム」の動画を取り入れて非常に分かりやすく講演された。

■褥瘡対策室より

褥瘡対策は病院全体で取り組むべき重要な課題であり、医師、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士、事務職員など病院の全スタッフが正しい知識を共有して行う必要があります。そこで平成22年度は新たな試みとして年４回シリーズで褥瘡の院内研修会を開催させていただきました。４回すべて受講していただければ褥瘡の発生機序、予防、栄養管理、重症度評価、治療など褥瘡のすべてをご理解いただけるような内容で準備させていただきました。褥瘡対策は地道な活動ですが、褥瘡ゼロ病院を目指して今後とも職員の皆様のご協力をお願いできれば幸いです。　（室長　森脇　真一）

…第６回褥瘡対策室院内研修会

日　時：平成22年９月７日（火）午後５時～午後６時
場　所：臨床第一講堂
演　者：皮膚・排泄ケア認定看護師　池　　智代
　　皮膚・排泄ケア認定看護師　河口　美幸
内　容：１．褥瘡対策の背景（褥瘡管理加算、褥瘡ハイリスク患者ケア加算について）
　　２．褥瘡発生の予防、予測（リスクアセスメント）
　　３．アセスメントに基づく看護ケアの選択
　　４．体圧分散寝具の選択について

…第７回褥瘡対策室院内研修会

日　時：平成22年10月12日（火）午後５時～午後６時
場　所：臨床第一講堂
演　者：皮膚・排泄ケア認定看護師　河口　美幸
　　皮膚・排泄ケア認定看護師　池　　智代
　　栄養士　　山神　まり子
　　理学療法士　　高山　竜二
内　容：１．体圧分散・スキンケア
　　２．栄養管理
　　３．リハビリテーション

…第８回褥瘡対策室院内研修会

日　時：平成22年12月14日（火）午後５時～午後６時
場　所：臨床第一講堂
演　者：皮膚科　　黒川　晃夫
　　薬剤師　　樋口　沙織
　　皮膚・排泄ケア認定看護師　河口　美幸
内　容：１．褥瘡の評価、記録「DESIMGN-R　褥瘡経過評価」
　　２．褥瘡の局所管理方法、ドレッシング材、薬剤の選択、使用方法について

…第９回褥瘡対策室院内研修会

日　時：平成23年３月22日（火）午後５時～午後６時
場　所：臨床第一講堂
演　者：形成外科　大谷　一弘
内　容：褥瘡対策の実際（症例を通して）

平成23年度LDセンター活動予定

2011年度　講演・研修会予定表

月　　日	曜	時間	講　演　内　容	講　師　名（予定講演順）
5月１日	日	午後	発達障害の理解と支援～医療と教育では「発達障害」をどのように捉えるのか～	竹田契一　玉井浩
5月より3回	金	午前	幼児期のソーシャルスキル指導a（5月13日、5月27日、6月10日）	西岡有香
5月22日	日	午後	発達障害をうたがう子どもへの対応	里見恵子　河内清美
5月28日	土	終日	WISC－ⅣはWISC－Ⅲとどう変わったか	上野一彦
5月29日	日	午後	発達障害のある人の青年期を支える最新の動向	上野一彦　近藤武夫
5月30日	月	午前	子どもの見る・聞く力の理解とその指導	竹下盛
6月５日	日	午後	ソーシャルスキルトレーニングの実際	岩坂英巳
6月11日	土	午後	発達障害の子どもに見られる視覚能力の問題とその指導～基礎編	奥村智人
6月より2回	金	午前	高学年の子どもへのソーシャルスキル指導（6月24日、7月1日）	西岡有香
7月９日	土	午後	発達障害の子どもに見られる視覚能力の問題とその指導～実践編（1）	奥村智人　少徳仁
7月12日	火	午前	幼児期に経験する体の動きは学習や社会性の土台	芳本有里子
7月18日	月	午前	発達障害のある幼児・低学年の子どもの見方	西岡有香　栗本奈緒子
		午後	発達性読み書き障害のアセスメントと指導	若宮英司　村井敏宏
7月30日	土	終日	発達障害アセスメント研修会（WISC－Ⅲを中心に）	山田充　水田めくみ　栗本奈緒子
8月６日	土	午後	発達障害の子どもに見られる視覚能力の問題とその指導～実践編（2）	奥村智人　栗本奈緒子
8月７日	日	終日	わかりやすい生活空間・環境調整は子どもへの「配慮」	竹田契一・里見恵子・辻薫・芳本有里子
8月27日	土	午後	通常学級での特別支援教育スタンダード	小貫 悟　堤 章治
9月より3回	金	午前	低学年の子どもへのソーシャルスキル指導（9月9日、16日、30日）	西岡有香
9月13日	火	午前	子どもが取り組む手を使う作業に大人はどう援助するか	芳本有里子
10月２日	日	午後	ダウン症の理解と支援～就学に向けた幼児期の指導～	玉井浩　里見恵子　玉木啓之
10月15日	土	終日	視覚能力のアセスメントとトレーニング～ワークショップ	奥村智人　中村明子　三浦朋子
10月16日	日	午後	特別支援教育における医療と教育の連携～滋賀県の例から学ぶ	宇野正章　小西喜朗
10月22日	土	終日	算数での子どもの誤り分析	山田充　今村佐智子　栗本奈緒子
10月23日	日	終日	子どもの読み書きの誤りから得られる情報とは	村井敏宏　水田めくみ　西岡有香
10月31日	月	午前	子どもの読む力・書く力の理解とその指導	水田めくみ
11月12日	土	午前	発達障害のある子どもと家族を支える	米田和子
		午後	障害のある子どもの家族への理解と支援	中田洋二郎
11月19日	土	午前	感情のコントロール力を伸ばすには？	中尾繁樹
		午後	学校現場で役立つさまざまな子どもの問題への対応	田中英高
12月４日	日	午後	ADHDの理解と支援　久留米ADHDプログラムの取り組み	山下裕史朗
12月17日	土	午前	発達に課題のある子どもへの遊びを通した支援	森田安徳
		午後	発達障害はどうして子どもの虐待に結び付くのか	玉井邦夫
1月７日	土	午後	K－ABCとK－ABCⅡはどう変わったか	石隈利紀
1月より3回	金	午前	幼児期のソーシャルスキル指導b（1月13日、1月27日、2月10日）	西岡有香
1月14日	土	終日	発達障害アセスメント研修会（WISC－Ⅳを中心に）	山田充・水田めくみ・栗本奈緒子・西岡有香
1月28日	土	終日	視覚能力のアセスメントとトレーニング～ワークショップ	奥村智人　中村明子　三浦朋子
1月30日	月	午前	かぞえる・くらべる～算数の学習に必要な基礎力	栗本奈緒子
2月25日	土	午前	発達障害のある子どもの二次障害	金泰子
		午後	就学前に学校に伝えたいこと	松尾育子　高畑芳美　西岡有香
3月10日	土	終日	DN－CAS認知評価システムって？	中山健
3月18日	日	午後	当事者に聞く思春期・青年期の課題	竹田契一　品川裕香

http://www.osaka-med.ac.jp/deps/ldc/index.html　　大阪医科大学LDセンター　TEL072-684-6236

■大学安全対策室からのお知らせ

大学安全対策室　室長　河野　公一

「化学物質等保管状況に関する調査委員会」は平成23年１月11日から１月31日にかけて、全36教室（実習室、医局等含む）を対象に化学物質等の保管状況を確認するために、初めて立入調査を実施いたしました。その結果、化学物質等を適正に管理されている教室は数教室に過ぎず、非常に危険な状態で保管している教室が少なくありませんでした。この状況を一掃するために、廃棄希望の試薬類を３月30・31日に一括廃棄いたしました。

さらに、高圧ガスボンベも期限切れで危険な状態で多数保管されていることがわかりましたので、病院事務部施設課と共同で３月25・30日の両日に回収いたしました。また、ホルマリン浸漬臓器標本の一括廃棄も４月21・22日に実施いたしました。これらを実施したことで教室実験室等が整理整頓され、事故発生の恐れは大きく低下し、安全性が増したものと考えております。

２月14日および３月７日には安全に対する意識向上を目的に研修会を開催し、今後も引き続き啓発に努めて参ります。

なお、学長より３月19日から８月31日まで「研究室の安全管理検討委員会」の発令がなされ、この委員会と共同で研究環境を整備することになりました。

＊　上記研修会のDVDの貸出をいたしますのでご利用ください。

【連絡先】　大学安全対策室（総合研究棟１階）内線3404、3405
E-mail　sps000@art.osaka-med.ac.jp
URL　www.osaka-med.ac.jp/deps/sps/index.html

大学安全対策委員会		
大学の安全管理を考える研修会		
2/14「リスクマネジメント全般基礎、薬品管理を中心に」	インターリスク総研	緒方順一
3/7 「立入調査を終えて」	大学安全対策副室長	岡田仁克
「リスクマネジメントの必要性について」	インターリスク総研	土居英一
薬品管理小委員会		
麻薬および向精神薬、危険物に関する取扱手引き作成		
試薬類・ホルマリン浸漬臓器標本・血液サンプルの一括廃棄		
感染対策小委員会		
新型インフルエンザ行動計画（案）および行動対応表（案）作成		
化学物質等管理状況の調査委員会		
化学物質等の管理状況の調査および報告		

保健管理室からのお知らせ

■平成22年度特定健康診査について

平成20年度より「高齢者の医療の確保に関する法律」（平成20年４月施行）に基づいて、40歳から75歳未満の医療保険加入者等（任意継続加入者及び被扶養者を含む）を対象に特定健康診査及び特定保健指導を実施してきました。平成22年度の特定健康診査は昨年10月に実施し、日本私立学校振興・共済事業団（以下「私学事業団」）に報告しました。私学事業団においてメタボリックシンドローム該当者及び予備群に相当する保健指導対象者が選定され、対象者には「特定保健指導利用券」が送付されますので、同封の案内を熟読の上、保健指導を受けて下さい。

また特定健康診査や保健指導の対象でなかった方も、健診での所見の有無に関係なく健康診断結果を活用して、自分自身の体の状態や生活習慣を振り返りましょう。

■カウンセリングのご案内　～ 一人で抱え込まないで、早めに相談しましょう ～

新年度に入り、異動、入職、入学など環境が大きく変わる時期です。新しい環境、生活に慣れるためにストレスが高まりやすく、疲れがとれない、気持が落ち込みやすい…など心身ともに疲労状態となります。この状態が続くと、中にはうつ病など心の病気に陥ってしまうこともあります。身体疾患と同様にこころの不調も早めの対処が重要ですので、“しんどいな”と感じたら上司や先輩、友達に相談しましょう。また本学の保健管理室には臨床心理士が常勤し相談業務を行っていますので、気軽にご利用下さい。

なお相談内容の秘密は厳守しますので、ご安心してお越し下さい。

【利用方法】

① 保健管理室（研究棟１階）に直接来室して下さい。あらかじめ日時を予約することもできます。
② 電話、メールでの問い合わせ、予約も受付けています。
③ 受付時間：月～金曜日　9：00～17：00（予約有の場合、17：00以降でも可）
④ 問い合わせ先：072-684-6560（カウンセリング直通電話）　E-mail：hokekan@poh.osaka-med.ac.jp

異なる種類のワクチンを接種する場合の注意

本学では、B型肝炎ワクチン接種及び、インフルエンザワクチン接種を希望者に実施しています。また麻疹、風疹、水痘、流行性耳下腺炎の抗体が無い場合は、ワクチン接種を強く勧めています。特に新入生や新入職員は抗体が無い場合が多く、複数の異なる種類のワクチンを接種することになってきます。

異なったワクチンを接種する場合、各々のワクチンに定められた接種間隔を守るよう注意して下さい。また本学が実施するワクチン接種（B型肝炎、インフルエンザ）は日時が決まっていますので、他のワクチン接種と重なると接種ができなくなります。ご注意ください。

①生ワクチン（麻疹、風疹、流行性耳下腺炎、水痘など）は、次の接種を行う日までの間隔は27日間以上

②不活化ワクチン（B型肝炎、インフルエンザ、子宮頸がんなど）は、次の接種を行う日までの間隔は６日間以上

平成23年度４月～８月の健康診断、感染症事業のご案内

■Ｂ型肝炎ワクチン接種のご案内

１回目B型肝炎ワクチン接種・追加ワクチン接種、及び２回目B型肝炎ワクチン接種・追加ワクチン接種者の抗体確認検査を下記のように実施します。

１回目B型肝炎ワクチン接種・追加ワクチン接種

【実施日時】平成23年６月２日（木）、３日（金） 15：30～16：30

【場　　所】総合研究棟１階　保健管理室

【対 象 者】４月に抗体検査を受けてワクチン接種を申込された方（但し昨年度３回のワクチン接種を受けられた方は対象外）となります。

２回目B型肝炎ワクチン接種

【実施日時】平成23年７月７日（木）、８日（金） 15：30～16：30

【場　　所】総合研究棟１階　保健管理室

【対 象 者】６月に１回目B型ワクチン接種を受けた方

追加ワクチン接種者の抗体確認検査

【実施日時】平成23年７月７日（木）、８日（金） 8：45～10：00、15：00～16：00

【場　　所】総合研究棟１階　保健管理室

【対 象 者】６月に追加ワクチン接種を受けた方

平成23年度B型肝炎ワクチン接種スケジュール

		6/2（木） 6/3（金）	7/7（木） 7/8（金）	12/1（木） 12/2（金）	平成24年 1/18（水） 1/19（木）
新規	初めて受ける人 抗体を獲得したことがない人	１回目 ワクチン接種	２回目 ワクチン接種	３回目 ワクチン接種	抗体確認検査
追加	以前ワクチン接種で一度抗体を獲得した人	追加 ワクチン接種	抗体確認検査		

■特定業務従事者健診、有機溶剤・特定化学物質健診のご案内

平成23年度特定･深夜業務従事者健診、有機溶剤・特定化学物質健診を実施します。この健診は労働安全衛生法第66条第２.３項、有機溶剤中毒予防規則第29条、及び特定化学物質等障害予防規則第39条に基づいて実施します。

対象者には事前に健診案内を配布しますので、日時などを確認の上、必ず受検して下さい。

【実施日時】平成23年５月25日（水）～27日（金） 9：00～16：00

【場　　所】保健管理室、第７、８会議室（総合研究棟１階）

■長時間労働者健診のご案内

平成23年度春季　長時間労働者健診を実施します。

【対 象 者】平成22年９月～平成23年３月の間、月45時間以上の時間外・休日勤務をし、産業医が必要と認めた職員

【実施日時】平成23年５月25日（水）～27日（金） 9：00～16：00

【場　　所】保健管理室、第７、８会議室（総合研究棟１階）

歴史資料館　俳句

■歴史資料館市民講座

第４回 歴史資料館市民講座が、下記の通り開催されました。

日　時：平成23年３月５日（土）14：00～15：00
場　所：別館３階　講義室
演　題：義歯の歴史 ―木床義歯からインプラントまで―
講　師：口腔外科学　教授　島原　政司
参加者：約90名

◆大阪医科大学俳句会（二・三・四月）

かぞへるをよむと云ふなり年の豆　山崎隆司
鴨の陣陸に上がれど水に向く　同
広告の裏に筆算春炬燵　中川一成
流し雛万体積むは白木舟　吉田孝江
千手噴く観音早打ち壬生の鉦　同
悴みてなほ遊びたき三輪車　飯塚久子
水郷や花菜あかりを背に濯ぐ　同
乗降なき春宵の駅モノレール　美濃　眞
春時雨「和久伝」までは辻ひとつ　同
交番の壁の塗替春一番　宮脇芳美
春の潮橋の袂に虚子の句碑　同
菜の花や同行二人の鈴の音　寺田千代子
ややの爪やさしき色の桜貝　羽根美恵子
芦の芽や余呉はひねもす水ぐもり　谷口文子

周産期センターのリニューアル

この度、３月に周産期センターがリニューアル・オープンしました。これによりNICUは６床から９床に増え、またGCUも診療報酬加算のついた12床になりました。

本院周産期センターは母胎搬送や新生児・未熟児の搬送に多大な貢献を行って参りましたが、近年、先天性心疾患の手術件数が増加し、また大阪府など行政の後押しもあって、増床に踏み切りました。さらに高度周産期医療人養成推進プログラムなどの文科省からの資金も利用し、最新の機器を備えた施設としてオープンしました。これからも地域のニーズに応えて高度な医療を提供して参りたいと思います。

病院ボランティアのご紹介

2009年２月からふれあいメンバーによるボランティア図書活動が始まり、３年目を迎えました。

患者さまや教職員からの寄贈本も6,399冊（平成23年１月末）となり、各病棟のデイルームに19か所、７号館ラウンジコーナーに本棚があります。月１回ふれあいメンバーが本の入替を行っています。

東日本大震災に対するお見舞い並びに大阪医科大学の対応について

学校法人 大阪医科大学 理事長　植木　實
大阪医科大学 学　長　竹中　洋

東日本大震災により被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、亡くなられた方々へ衷心よりお悔やみ申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興を祈念申し上げます。

大阪医科大学は、この度の地震に対し、東日本大震災対策委員会を立ち上げ、全学を挙げて以下の事項に取り組んでおります。今後も長期的な視野で、日時の経過に即応した支援を続けてまいる所存です。

記

1．　医薬品等の支援
2．　義援金の募集活動
3．　被災地域あるいは被災地域周辺の医療機関などへの医療関係者の派遣
4．　被災された方々の生活援助に関わる事項
5．　被災地域で対応困難な患者様の本学附属病院への受け入れおよび治療
6．　その他必要と思われる対応

表紙絵：山吹（バラ科）
いつもの犬との散歩道、住宅街に面した里山の斜面にあでやかな濃黄色の五弁の花が咲き乱れている。葉はギザギザし、茎は青い。これは、おそらく観賞用に栽培したものであろうが、誰が世話をするわけでないのに、４月中旬から５月になると花をつける。有名な太田道灌と蓑の話に登場する山吹である。日本中どこにでも見られる。渓流の水辺に自生するこの花を呼んだ歌は多い。

大阪医科大学　名誉教授　冨士原　彰

個人情報の取扱について：

平成17年４月１日から個人情報保護法が施行されました。
これに伴い本学では、学報の発送にかかる個人情報につきましては、個人情報保護法を遵守し、適切な管理を行っております。
なお、収集・管理する個人情報につきましては、発送の目的以外に使用することはありません。
学報に関する個人情報についてのお問い合わせは、下記までお願いいたします。

大阪医科大学　総合企画部　学報編集担当係　電話　072－683－1221㈹
E-mail：gakuho@art.osaka-med.ac.jp

大阪医科大学学報　第88号
発 行 年 月　平成23年５月
発　　行　学校法人　大阪医科大学
編集・発行　総合企画部
印　　刷　大日本印刷株式会社
大阪医科大学ホームページ
http://www.osaka-med.ac.jp/